

2009  
September

9 月

高校版  
Volume

3

## 2 私を育てたあの時代、あの出会い

一匹狼たちが生徒のための集団に変わった  
長野県飯山北高校校長◎米澤修一

## 4 特集

「自立心」を育てる  
進路学習6 インタビュー 生徒の自立を促すこれからの進路学習を考える  
埼玉県立不動岡高校教頭◎久保島昌一 福岡県立城南高校教頭◎和田美千代10 学校事例① 北海道・市立函館高校  
論文で身に付ける表現力・論理力が自立への第一歩になる14 学校事例② 鹿児島県立甲南高校  
「KIプロジェクト」を核に取り組みの連関を見直し自立の芽を育てる

## 18 調査データから探る指導のヒント

「日本は競争が激しい」と厳しい社会認識を抱く大学生  
Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

## 19 指導変革の軌跡

20 静岡県立静岡高校  
初期指導強化◎「当たり前のこと」の徹底が学びに向かう姿勢を生み出す24 東京都・私立錦城高校  
進学実績向上◎「2年生の大切さ」の共有が進路実現の後押しとなる28 千葉県立姉崎高校  
学校再生◎小学校段階から始める「学び直し教材」で生徒の学ぶ意欲が育つ

## 32 生きたデータの徹底活用

1年生秋の中だるみ対策と「第一歩」としての文理選択

## 36 未来をつくる大学の研究室

蚊の生態や感染のしくみを解明し  
感染症の予防・治療につなげる  
帯広畜産大 原虫病研究センター 原虫進化生物学研究分野 嘉穂洋陸研究室

## 40 30代教師の情熱

「大学に入ったがしたいことが分からない」そんな生徒をなくしたい  
島根県・私立石見智翠館高校◎細木康弘

## 42 地方公立高校の挑戦

地域と協力し、小中高大の教育資源を最大限に生かす  
広島県立加計高校芸北分校

## 48 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは  
すべて取材時のものです。  
本文中、敬称略。  
本誌記載の記事、写真の無断複写、  
複製および転載を禁じます。



1984年、32歳の時に長野県長野高校に赴任しまし

た。長野県では74年に学区が変更され、それを境に県内有数の進学校である長野高校は次第に低迷。一時期は30人以上だった東京大合格者数も一桁台に、約30%だった国立大の現役合格率も10%台に、いずれも減少していました。

赴任当初は「進学校の授業」を行うだけで精一杯でしたが、次第に「長野高校はこのままでよいのだろうか」と思い始めました。既に創立100周年を迎えていた伝統校は、旧制中学校らしい自由な雰囲気を受け継いでいました。教師は「勉強は生徒がするもの、進路は生徒が決めるもの」というスタンスで、教科指導や進路指導に学校としての一貫性や継続性は見られませんでした。一匹狼のような個人的な教師が個人技で指導する学校だったのです。生徒も「自分のことは自分でやるから、学校は何もしてくれなくていい」という様子に見えました。

しかし、しばらくするうちに、もっと手厚い指導を望む生

## 私を育てたあの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

# 一匹狼たちが生徒のための集団に変わった

長野県飯山北高校校長 米澤修一 YONEZAWA SHUICHI

共通の目的のために、心を一つにする……。

それは、すべての集団の理想形であろう。しかし、その理想の実現は決して容易ではない。特に、集団の構成員が高い能力、そしてプライドを持っているれば、なおのことであろう。

では、誇り高い集団が生まれ変わる時、その長たる者はどう動いたのか。その姿に若い教師は何を学んだのか。長野県飯山北高校校長の米澤修一先生が熱き改革の時を振り返る。

徒も多いこと、私以外にも若手を中心に現状に疑問を感じている教師がいることが分かってきました。自主性を重んじる伝統は大切にするべきだが、今の生徒に昔と同じ指導を行うだけでは通用しないのでは……。危機感は大きくなるばかりでした。

30代の私が学校の在り方に意見を述べるなど、当時は考えられないことでした。私にできることは担当教科でプリント教材をつくってそれを学年全体で使っていたことくらい……。そんな小さな試みを積み重ねるうち、同校で6年が過ぎました。

長は生徒の学力低下に対して、早急な対策を講じる必要があると訴えました。しかし、校長の提案は「伝統に反する」と、受け入れられないことはありませんでした。率直に言えば、教職員は高野校長に対決姿勢を示したのです。



## 先輩教師の言葉

誇り高い教師たちを結び付けるのは生徒への思いです

元・長野県長野高校校長 TAKANO KOU 高野 幸



着任した当初、長野高校の学力低下は危機的状況で

した。しかし、古き良き時代を知る多くの先生方は「勉強は生徒がするもの」と考え、学校全体として共通認識を持つには至っていませんでした。米澤先生を始めとする一部の若い先生方が、「今の生徒にはそれだけでは通用しない」と感じ、何か手を打たなければとがいていたのです。教師は良くも悪くも誇り高い生き物です。学校を変える時も強引にやっては失敗します。だから私は徹底的に議論しました。討論の末の決定であれば、たとえ反対していても受け入れてくれるからです。方向転換には時間がかかるけれど、ひとたび舵を切れば一気に進む。学校は大きな船のようだと思います。米澤先生は、改革を求める若い教師の中心的存在でした。彼



良好とは言えない関係が続く中で、高野校長は教師一人ひとりの声に耳を傾けました。若手のアイデアを「面白そうじゃねえか」と肯定的に評価し、入学式や卒業式では奥様が炊いた赤飯を全教職員に配り、私生活で悩みを抱える教師がいれば父親のように一緒に解決策を考えました。毎日の校務に追われる中、英語の教授法の研修に参加すべきか迷っている私の背中を「やってみろ」と押してくれ、



3年間の週末の東京通いを応援してくれたのも高野校長でした。改革のための明確な哲学と施策を提示する一方、義理人情を大切に。生徒、PTAとも積極的に交流するその姿に、いつしか「考え方は違って、高野校長は信用できる」と皆が思い始めました。大きな転換点となったのは高野校長が着任して約半年、「本

校の教育を語る会」と題して開かれた1泊2日の校内教育研究会です。会議は深夜まで行われ、各教科から生徒の学力の実態が報告され、生徒の状況について初めて皆が共通認識を持ちました。これを契機に、ようやく改革の機運が高まりました。高野高校の教師の教科指導力は極めて高かったと思います。けれども、自分の授業のことにしか考えていない教師が多かったのです。「全員で長野高校の生

徒のことを考える」。それは初めてのことで、以来、さまざまな改革が始まりました。新入生オリエンテーション、合宿、校内授業研究会、中学生の1日体験学習など、私たちは温めていたアイデアを高野校長に提案しました。高野校長はいつも「拙速を恐れずやってみよう」と後押ししてくれました。それが自信となり、また次につながる。「そんなことはできない」と言われていたら、とても動けなかったと思います。一匹狼の集まりだった教師たちが、生徒のために一つになって、行動する集団として再生しました。

高野校長と同じ立場になった今、先生方がやりたいことをやっているか、それがとても気になります。教師にはやらなければならぬことはたくさんありますが、それだけではこの仕事は面白くありません。生徒のためにやりたいことをやることで、自分の教育力が高まるのです。高野校長が後押ししてくださったように、私も若い先生に「やりたいことをやろう」と呼び掛けていきたいと思っています。



右 よねざわ・しゅういち 英語科。岩村田高校、木曾高校を経て長野高校へ。同校で10年間教壇に立つ。松本深志高校教頭などを経て、2006年より現職。  
左 たかの・こう 地歴・公民科。長野高校には5年間校長として勤務。その後、文化女子大学附属長野高校、長野俊英高校で校長として学校改革に取り組み。

は、生徒に対して、少し努力すれば実現できる目標を提示し、達成する喜びを感じさせて、やる気を高めるのが上手でした。そういう技術を、ほかの若い先生方は米澤先生から学ぼうとしていました。生徒のために、お互いに教育力を高め合おうとしていた彼らは、私の取り組みを後押ししてくれました。長野高校の改革は、1人の力ではなく、生徒を中心とした教師のつながりがあったからこそ実現したのです。先生方に生き生きと働いてもらい、責任はすべて自分が取る。校長の仕事はこれしかありません。校長が主役になったり、活躍する教師をねたんだりしてはいけません。先生方の能力さえ引き出せば、学校は変わります。事実、長野高校での取り組みの多くは、先生方の発案でした。先生方との関係が対立から始まったのは事実ですが、最後はとても良い関係が築けました。伝統校の改革は校外からも注目され、時には誤解をもとに批判されたこともあります。その時、「それは事実とは違う」と最後まで私を守ってくれたのは、私と最も対立していたはずの先生でした。考え方は違っても、「生徒のため」というその思いさえ理解し合えば、仲間としてお互いに支え合えるのです。

※プロフィールは取材時(09年6月)のもので

# 自立心を 育てる 進路学習

高校3年間で取り組む進路学習——それは生徒にとって完結ではなく継続である。  
昨年度9、10月号特集「自立する高校生をどう育てるか」への読者からの反響を踏まえ、改めて「自立」をテーマに、学び、成長し続ける「自立心」を育むための、持続性のある進路学習について考える。

現在の「進路指導」は以前と比べて生徒の自立促進につながっていない

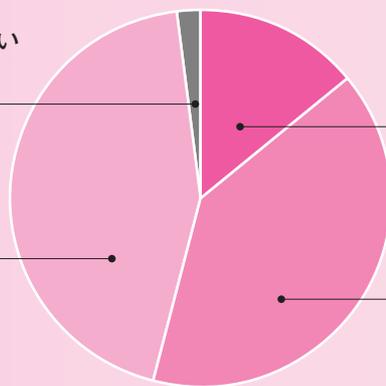
「VIEW21」高校版 読者モニターアンケート／調査時期○2009年6月／回答数○126件

ほとんどそう思わない  
2%

あまりそう思わない  
44%

とてもそう思う  
14%

まあそう思う  
40%



※数値は不明分を除く

現在の進路指導が以前と比べて生徒の自立促進につながっていないと感じている教師は5割を超える（「とてもそう思う」+「まあそう思う」）。

# 1 学校現場が指摘する進路学習の問題点

『VIEW21』高校版 読者モニターの声より抜粋

## 環境変化・生徒の実態

◎今、中学校ではかつて高校が行っていたような進路指導を行っている。中学校の現状を踏まえた**高校ならではの取り組み**が必要。〈静岡県〉

◎**入試の多様化**に高校現場が対応しきれていない。特にAO入試の時期が早くなっており、事前事後ともに指導が大変である。〈福島県〉

◎最近の生徒は、主体的な意思決定を敬遠し、自己の進路と今の自分との**葛藤を避けようとしている**傾向にあると思う。〈奈良県〉

◎社会貢献による自己実現という高次元の理想を持つ生徒層と、日々の楽しみを優先する生徒層との**二極分化**が進んでいる。〈富山県〉

## 指導の本身

◎与える指導や調べさせる指導が多く、**気付けさせる指導が少ない**。生徒への日々の問い掛けや語り掛けが弱くなったと思う。〈秋田県〉

◎教師が情報を生徒に流すばかりで、自分から調べようとする意識を逆に低下させている気がする。**生徒の答えを待てない**状況だ。〈広島県〉

◎高校時代に**実学、実用、就職を意識しすぎている**きらいがある。その結果、将来の職業選択まで幅を狭めているように思える。〈茨城県〉

◎今の努力が将来に結び付くことを理解させるべき。そのためにも**日常の学習姿勢、積み上げをきちんと評価するシステムが必要**。〈愛知県〉

## 教師・組織の力

◎1年次からの丁寧な基礎づくりが形骸化し、教師側の組織的な授業改善も進んでいない。**学校の基礎体力を見直す**時期だ。〈埼玉県〉

◎大学入試の変容、地域あるいは家庭の抱える問題点など、社会の動きそのものについての**教師の知識が不足**している。〈山形県〉

◎教師が異動して顔触れが入れ替わっても、**学校としてぶれることがない進路指導**をし、進路実績が残せるかが問題。〈長崎県〉

◎取り組みをいかに厳選するか、いかに維持充実を図るか。そして、**改革の熱をどう伝え、伝承していくか**が問われている。〈滋賀県〉

# 2 生徒の「自立心」が育つ場面

インタビュー …… P.6



久保島昌一 和田美千代

埼玉県立不動岡高校教頭

福岡県立城南高校教頭



「今の自分」と「なりたい自分」との間で葛藤する過程

「大学受験」の機会を通じた成功や失敗、挫折体験

# 3 学校現場での進路学習の実践

グローバル社会に対応できる力(コミュニケーション力など)の育成

ルーティンに一工夫。校内のあらゆる取り組みを進路学習の観点から見直す

北海道・市立函館高校

P.10

◎寄り道を何度も繰り返す中で進路を選ぶ力を養う

◎「論文」の書き方指導を重視し、表現力・論理力を身に付ける

鹿児島県立甲南高校

P.14

◎実施内容を見直し、硬直化した進路観を広げる

◎取り組み間の連関性を意識し、内容や順序を改める

# 生徒の自立を促す これからの進路学習を考える

生徒が志を持って人生を切り開く力を育成するため、多くの学校が「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)などで進路学習を展開してきた。主体的に学習に向かう姿勢の育成を推進してきた埼玉県立不動岡高校の久保島昌一教頭、「ドリカムプラン」の立ち上げにかかわった福岡県立城南高校の和田美千代教頭に、進路学習の課題と展望をうかがった。

Kuboshima Shoichi



埼玉県立不動岡高校教頭

**久保島昌一**

教職歴31年。同校に赴任して1年目。1992年から2001年まで不動岡高校教諭。99年から教務主任として新課程(現行)の準備に着手。01年度の1年間、総合学習「F-プラン」の実施計画の策定に尽力した。09年度、同校教頭として再赴任。

## 「今の自分」と「なりたい自分」との 間での葛藤が生徒の自立を促す

今までの進路学習

教師の働き掛け次第で  
生徒の主体性は伸びる

ここ数年、生徒が受け身になった  
と実感しています。与えられた課題

はきちんとこなすものの、強制されないと、途端に提出率が低くなる。ノートはきちんと取るが、それだけで勉強したような気になってしまふ。2002年度に不動岡高校で総合

Wada Michiyo



福岡県立城南高校教頭

**和田美千代**

教職歴26年。同校に赴任して2年目。1986年に城南高校に赴任。94年から、同校の「ドリカムプラン」の企画・実施に携わる。2000~02年、城南高校が文部省研究開発学校の指定を受け、01~02年と研究開発主任。03年から5年間、筑紫丘高校に勤務。08年に城南高校に教頭として再赴任。

## 「大学受験」も 生徒の自立にとって大切な機会

今までの進路学習

教師主体の進学指導から  
生徒主体の進路学習へ

近年、大人として自立できないまま、  
社会に出ていく若者が増えてい

るように感じます。かつて、大学入試や就職活動といった「通過儀礼」は、子どもたちの自立を促す重要な節目でした。その山を越えれば明るい未来が待っているという展望を描き、

学習「Fープラン」を導入した時、既に同じ課題に直面していました。主体的に学習に向かう姿勢、確かな学力と豊かな表現力を身に付けるという目標の下、教師一丸となって取り組みを進めてきました。

しかし、生徒を自立に導くには、学校や生徒を取り巻く状況が、当時に厳しくなっていることを感じます。04年度から埼玉県の高校の学区が撤廃されたことで、我々教師は大学合格実績をより意識せざるを得なくなりました。更に08年度、本校は単位制に移行し、生徒の意識は科目選択に向いてしまい、ゆつくりと自分自身や将来を見つめ直す時間も

### 不動岡高校「Fープラン」とは

◎02年度に1〜3学年で導入され、以来7年間継続している総合学習の取り組み。1年次「自分を知り、社会を知る」、2年次「体験的に知を深める」、3年次「知を総合化し、表現する」がテーマ。進路講話や学部・学科研究、入試研究、小論文、個人研究等を通して「選択力」「社会力」「表現力」を身に付け、「明日の世界を創造する品格あるリーダーの育成」を目指す。

ますます少なくなってしまう。

ただ、教師の働き掛けや課題の与え方次第で、生徒はきちんとアウトプットできる潜在能力を持っていることも実感しています。しかし実際は、授業でインプットしたことを生徒がどのように消化し、アウトプットまでつなげるかに、教師の目が向けにくくなっているように感じます。生徒の主体性を育むためには、何よりもアウトプットの強化が大切であり、そのために進路学習があると思っています。

### 短期目標に目を奪われず 取り組みの理念を振り返ろう

本校の生徒は3分の2が国公立大志望ですが、最近は途中で息切れして志望校を変更する生徒も増えていきます。力がありながら妥協してしまふ。それは長期的目標を持ってないからであり、だから生徒は短期目標にばかり目を奪われているのでしよう。本校の「Fープラン」の課題の1つもそこにあります。3年間を見通したプログラムでありながら、次の学

そこに向けて努力することができました。今は先が見えない閉塞感が社会全体を覆い、高校生は山の向こう側にある希望を信じられず、学ぶことに対する意義も見いだせなくなっています。

さまざまな体験を通して生徒の意欲を喚起し、主体的に進路を切り開く力を身に付けさせる――。この目的の下、城南高校で「ドリカムプラン」を開始したのは、1994年のことでした。当時は「進路学習」という概念すらなく、偏差値から大学を選ぶ進路選択が中心でした。そこへ我々は、職業や将来像から学問や大学を考えさせる進路学習の在り方

### 城南高校「ドリカムプラン」とは

◎1994年度に導入。生徒の主体的な自己選択能力、進路設計能力の育成を通じて、社会の変化に対応できる力を育成する進路学習。従来の偏差値中心の進路選択から、自己実現の可能性を探る進路選択への転換を図り、全国の高校の進路指導に多大な影響を与えた。職業人講話や職業・大学研究オープンキャンパス訪問など系統的な進路学習に取り組み。

を示し、同じ課題を抱える多くの高校の共感を呼びました。高校の進路指導が、教師主導の進路指導から生徒主体の進路学習へシフトする上で、ドリカムプランの果たした役割は小さくなく、思っています。

### 将来像と現実を見据える バランス感覚が大切

生徒に進路を考えさせる時、2つの方向性があると思います。1つは、大学の先にある将来像を描かせて学問・大学を選ぶ視点、もう1つは、現在の状況に照らして将来を考える視点です。ドリカムプランについて語られる時、しばしば前者が強調され、「ドリカムは将来のことを決めさせる取り組み」と誤解されることがあります。

しかし、大切なのはどちらか一方ではなく、いかに両方のバランスを取っていくかということであり、これはドリカムプラン導入時からずっと言い続けてきたことです。確かに、将来の展望や夢があるからこそ、挫折や逆境を乗り越えることができる。

年への連続性、発展性の視点があいまいになっていく気がします。もつと3年間というスパンを意識すべきではないかと思えます。いま一度、それぞれの短期目標がなぜあるのかを根本から問い直し、取り組みの本当の狙いを確認する必要があります。

### これからの進路学習

#### 「なりたい自分」だけを追求しても成長はない

進路学習で大切なのは、さまざまな体験を通して生徒の志を育て、社会への興味関心を引き出し、将来へ歩み出すための土台を築くことです。その土台をつくる役割を果たすのが「F-プラン」だと考えています。では、そのために、どのような工夫が必要なのでしょう。職業調べや学問研究も、ある程度は必要だと思います。しかし、それ以上に大事なのは、生徒に「今の自分」と「なりたい自分」の両方を意識させることだと思います。子どもたちが将来を考える時、今の自分を否定してか

「そもそも、「国公立大〇人合格」といった目標を掲げたのはなぜか。大学に入れること自体が我々の目標ではなかったはず。新学習指導要領の施行を間近に控えた今こそ、総合学習を立ち上げた当初の理念や目標に立ち返るべきだと思えます。」

がどんなに嫌な自分であろうとも、今の自分を見つめるところから始めなければ、理想の自分を描いたところで、そこに到達することはできません。理想と現実の間を行ったり来たりする中で、子どもたちの心は激しく揺れ動く。揺さぶられ、葛藤する過程そのものが、子どもの成長にとって最も大切です。だから、現実と理想の両方が必要なのです。

しかし、今のキャリア教育は「なりたい自分」にばかりスポットが当てられているように思います。興味関心だけを追求していたのでは、葛藤は生まれませんし、あまりにきれいな将来像を描いてしまうと、いざ壁に突き当たった時、立ちすくんでしまうということになりかねません。

しかし、無理に将来像を描かせようとすれば、展望を描けない生徒にとっては強迫観念にとらわれてしまいます。あるいは、好きなことを仕事にしないでなければならないという誤った職業観を植え付けることになりかねません。自分の将来は流動的なものであり、気持ちや置かれた状況も変わっていくもの。変化に柔軟に対応できる力を育むこそが大切なのです。

また、意欲を高めるだけではなく、学力もしっかり身に付けさせる必要

### これからの進路学習

#### 教科指導を通して社会や将来を考えさせる

4年前から、本校ではドリカムプランを含めた進路学習の全体像を見直し、徐々にスリム化を進めてきました。長年に渡る取り組みを通して気付いたのは、あえてイベントに頼らなくても、日常の学校の活動の中に、いくらかでも進路学習の場面はあるということです。従来のイベント型の進路学習から日常型の進路学習



があります。意欲と学力は、両輪です。どちらか一方に偏ることがないよう、常にバランスを心掛けていくことが、進路学習を進める上で欠かせない視点だと思います。

への転換が、今のドリカムプランの最大の課題です。

例えば、社会人として必要なあいさつがきちんとできる、時間を守るといったことは生活指導の中で十分に身に付けることができます。教科についても、教材の取り上げ次第で、社会や将来を意識させることは可能です。例えば、国語で『羅生門』を扱う際、主人公の下人とリストラの対象となった派遣労働者の立場を重ね合わせることで、今日的な課題意

土台をしつかり築くには、興味関心のある職業を調べるだけでなく、働く意味そのものを考える機会を生徒に与えるべきです。「F-プラン」でも、1年次の職業に関する時間を増やし、働くことの意味を徹底的に考えさせて生徒の意識を揺さぶる内容に変えていければと考えています。

### 「ルーティンに工夫」で 進路学習の効果を高める

教師の多忙感が増す中で、取り組みを増やしたり、今ある取り組みを大幅にリニューアルしたりするのは現実的ではありません。総合学習だけではなく、学校のあらゆる取り組みを進路学習の観点から見直すことが重要だと思います。今ある取り組み



みを少し視点をずらして見直すことが大切で、私はこれを「ルーティンに工夫」と言っています。

例えば、学校行事は立派な進路学習です。目標に向かって進む中で、時にはうまくいかないこともあるでしょう。その葛藤の過程で、人間関係をづくり、共同作業の大切さを知る。その際、生徒が主体的に動き、考える機会や葛藤する場面を、教師が意図的につくり出す配慮も必要です。学校内の取り組みのすべてが、生徒の自立に向けた学習につながっているという意識を、教師一人ひとりが持つことが大切です。

今は、中学校でも職場体験学習などが進み、生徒は職業の種類に関してはある程度の知識を持っています。だからこそ高校では、「何のために働くのか」を突き詰めて考えることが必要です。そんな機会は、ひよつとしたら高校時代が最初で最後かもしれないかもしれません。3年後、生徒が将来に向けて自ら歩み始めるために、我々がすべきことは何か、改めて考える時が来ているのではないのでしょうか。

識を掘り起こすことができます。2009年からドリカムプランのテキスト「ドリカムブック」の中に、各教科と日常生活や将来とのつながりを示したのも、教科学習への意欲を高めると同時に、教科から社会を考える視点を育みたいと考えたからです。

### 挫折体験が 生徒の自立の芽を育む

生徒の自立を促すという意味で、「大学習験」は進路学習の中でとても大切な機会です。

大学習験の前期日程の1日目では、ひどい失敗をした生徒から、「報われなくても足を進める勇氣」という言葉をメールでもらったことがあります。その生徒は、自分にそう言い聞かせて、2日目の試験に出掛けていきました。大学習験は、計画、修正、成功、挫折、失敗、再生……いろいろなことを教えて、魂を成長させてくれます。

人は成功体験よりも失敗や挫折を通して、本当に大切なものをつかん

でいくものです。そうした体験をいかに多く積み重ねられるかというところが、これからの進路学習に欠かせない視点だと思っています。

また、今後は、グローバル社会に対応できる力の育成に力を注いでいくつもりです。そのためには、もつと社会への関心を持たせなければなりませんし、コミュニケーション能力や表現のスキルを磨いていく必要もあります。本校では、グローバル社会で必要な力を「城南CCS (Communication, Career, Science)」と位置付け、さまざまな場面で表現の機会を設けていくつもりです。

閉塞感の漂う社会において、希望を持って生きていくことは簡単ではありません。そうした中でも、生徒には、果敢に目標にチャレンジし、跳ね返されてもまたぶつかっていく経験を通して、一日一日を誠実に生きるこの大切さを感じてほしいと思います。明るい未来を描き困難を乗り越えていく人材が、これからの社会を切り開いていく力になるのです。

# 論文で身に付ける 表現力・論理力が 自立への第一歩になる

「大学に入ってから必要となる学力」の養成に力を入れてきた、市立函館高校。小論文やディベートで必要な論理的思考力や議論する力の習得は、推薦入試・AO入試の合格者増にも結び付いている。

## 推薦・AO入試にも対応する 「見えない学力」を育成

市立函館高校は、2007年度に函館東高校と函館北高校が統合して設立された進学重視型単位制高校だ。国公立大現役合格者数は、100〜150人と安定し、道内の高校の中でも高い実績を誇る。

「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）での指導の体系は旧函館東高校での実践を受け継ぐ。旧函館東高校で総合学習の立ち上げの事情を

知るガイダンス総学部の吉田修平先生は、当時は次のように振り返る。「函館東高校は1995年度に国公立大現役合格者数の道内順位が30位から転落し、進学実績の向上の道を模索していました。当時の指導は教師主導型で、教師が課題を与えて勉強させる取り組みが中心でした。しかし、それでは我々教師が教えること以上の成果は生まれません。03年度に始まる総合学習を生徒の主体性を高め、学ぶ意欲を引き出すための起爆剤にできないかと考えました」

総合学習で重視したのは、「大学や社会で通用する力」の育成だ。単に教科の問題を解く力ではなく、論理的に考えたり表現したりする力、調査してまとめる力、知的好奇心、社会に対する関心、自ら課題を発見し、正解が見えないことにも果敢に挑戦する態度などだ。そうした力の育成が、推薦入試・AO入試の実績にも結び付くと考えた。

総合学習の企画・運営を担うガイダンス総学部長の谷藤純一先生は「結果的に推薦入試・AO入試合格者数が伸びていますが、総合学習を対策として位置付けているわけではありません。あくまで、大学や社会で主体的に行動できる力を身に付けることが主眼です」と強調する。

旧函館東高校は、総合学習において、小論文やディベート、課題論文作成、地元の公立はこだて未来大との連携による模擬授業などを次々と導入した。それまで60〜80人だった国公立大現役合格者は、安定的に100人を超えるようになった。函館北高校との統合後は、単位制となったこともあり、自分自身で、主体的に科目選択ができる力を育てることが課題の1つだ。

### 市立函館高校

©2007年度に函館東高校(1940年開校)と函館北高校(1963年開校)が統合し、進学重視型単位制高校となる。校地は国指定特別史跡の五稜郭跡に隣接した旧函館東高校を継承。「何を求める」を校訓とし、生徒一人ひとりの可能性をひらき、人間性を深める教育をめざしている。

設立 2007(平成19)年

形態 全日制/単位制・普通科/共学

生徒数(1学年) 320人

09年度入試合格実績(現浪計) 国公立大には、北海道大、北海道教育大、弘前大、岩手大、山形大、筑波大、札幌医科大、公立はこだて未来大など153人が合格。私立大には、中央大、法政大、立教大、同志社大、立命館大など延べ301人が合格。

住所 〒040-0002 北海道函館市柳町11-5

電話 0138-52-0099

WEB PAGE <http://www.hmshs.jp/>

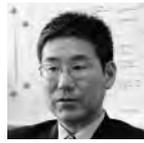
## 学問系統別学習で 生徒の視野を広げる

同校の総合学習の狙いは、「視野を広げること」「表現力を身に付け



市立函館高校  
辻田信行 Tsujita Shinji

教職歴21年。同校赴任歴9年目。進路部長。「情報をうのみにせず、疑問を抱き、分析する力を付けさせたい」



市立函館高校  
谷藤純一 Tanifuji Junichi

教職歴29年。同校赴任歴6年目。ガイダンス総学部長。「こだわりを持って好きなことを追求してほしい」



市立函館高校  
門馬甲兒 Monma Koji

教職歴27年。同校赴任歴18年目。進路部副部長。「生徒には世の中のことをしっかりと知って、視野を広げてほしい」



市立函館高校  
吉田修平 Yoshida Shota

教職歴25年。同校赴任歴9年目。ガイダンス総学部長。「大きな夢を持ち、何にでも挑戦する生徒を育てたい」



市立函館高校  
星野朋己 Hoshino Tomomi

教職歴23年。同校赴任歴8年目。3学年担任。「自分の可能性に気付く、信じ、追求する力を身に付けてほしい」

ること」にある。視野を広げるために指導で意識しているのは、「揺さぶり」と「絞り込み」だ。自分で立てた目標やテーマについて深く調べ、生徒同士で表現するプロセスを通じ、自分に足りないものに気付く、ほかの生徒の良い面を吸収する。刺激を受けた上で、新たなテーマに目を向けたり、再び自分の興味・関心を絞り込んだりしていく。早期に目標を決めて一直線に努力させるのではなく、寄り道を何度も繰り返し直すことによって、自分自身の興味・関心を確認し、確信を持って進路を選べる力を養うのである。

進路部長の辻田信行先生は、地方にある学校ゆえの課題をこう話す。「生徒の多くはまだまだ視野が狭く、社会を具体的にイメージできていません。地方の学校ということもあり、限られた世界で進路を考えようとするため、選択の幅が狭くなりがちです。1年生の段階で幅広い学問分野があることを学ぶ時間をしっかりと確保し、その上で自分自身に対する理解を深め、より主体的に進路を選択

図1 「総合的な学習の時間」の3年間の流れ

1年次（小論文を柱に）		2年次（ディベートを柱に）		3年次（課題研究論文を柱に）	
月	日 実施内容	月	日 実施内容	月	日 実施内容
4月	15日 作文「市立函館高校に入学した喜びと抱負」	4月	14日 オリエンテーション	4月	13日 課題研究①（オリエンテーション）
	22日 単位制ガイダンス（学年全体指導）		16日 単位制全体ガイダンス		20日 課題研究②（テーマ決定・文献カード作成）
					27日 課題研究③（レジュメ執筆）
5月	27日 全体オリエンテーション・学問系統別学習①	5月	12日 デイバート①（オリエンテーション・模擬ディベート）	5月	11日 課題研究④（第1回中間発表会）
			26日 デイバート③（形式説明・記録の取り方・審判法）		18日 課題研究⑤（論文の書きかた）
6月	3日 学問系統別学習②		ディバート④（形式説明・記録の取り方・審判法）		25日 課題研究⑥（個人研究）
	18日 講演会	6月	2日 デイバート⑤（班分け・マイクロディベート）	6月	1日 課題研究⑦（第2回中間発表会）
	24日 学問系統別学習③		ディバート⑥（マイクロディベート）		8日 課題研究⑧（個人研究）
7月	1日 出前講義		18日 講演会		15日 課題研究⑨（個人研究）
	22日 学問系統別学習④		23日 デイバート⑦（クラスディベート第1回）		18日 講演会
8月	19日 学問系統別学習⑤		ディバート⑧（クラスディベート第1回）		22日 課題研究⑩（個人研究）
	21日 はこだて未来大ジョイント企画		ディバート⑨（クラスディベート第1回、アフターディベート）		29日 課題研究⑪（下書き提出）
9月	2日 学問系統別学習⑥	7月	1日 出前講義	8月	17日 課題研究⑫（清書提出）
	9日 学問系統別学習⑦（系統別発表）		9月 1日 見学旅行研修①		24日 課題研究⑬（クラス発表会準備）
	学問系統別学習⑧（系統別発表）		8日 見学旅行研修②		31日 課題研究⑭（クラス発表会）
10月	2日 3年課題研究全体発表会参観		29日 見学旅行研修③		課題研究⑮（クラス発表会）
	14日 学問系統別学習⑨（全体発表）	10月	2日 3年課題研究全体発表会参観		課題研究⑯（クラス発表会）
	学問系統別学習⑩（全体発表）		6日 見学旅行研修④		課題研究⑰（クラス発表会）
12月	9日 小論文①（オリエンテーション・文章作法）		13日 見学旅行研修⑤		課題研究⑱（クラス発表会）
	小論文②（オリエンテーション・文章作法）	11月	10日 見学旅行研修⑥		課題研究⑲（クラス発表会）
	16日 小論文③（構成と校正の仕方）	12月	8日 デイバート⑩（KJ法）	10月	2日 課題研究⑳（全体発表会）
	小論文④（構成と校正の仕方）		ディバート⑪（KJ法・対戦相手・論議決定）		課題研究㉑（全体発表会）
1月	27日 小論文⑤クラス発表会		ディバート⑫（調査方法・理論構築・審判法）		課題研究㉒（全体発表会）
	28日 小論文⑥クラス発表会	1月	19日 デイバート⑬（調べ学習）		8日 自己評価・作文
2月	3日 小論文⑦クラス発表会		ディバート⑭（調べ学習）		
	4日 小論文⑧クラス発表会	2月	2日 デイバート⑮（クラスディベート第2回）		
3月	10日 小論文⑨全体発表会		ディバート⑯（クラスディベート第2回）		
	11日 自己評価・作文		ディバート⑰（クラスディベート第2回）		
			ディバート⑱（クラスディベート第2回）		
			16日 デイバート⑲（クラス対抗ディベート）		
			18日 自己評価・作文		
		3月	24日 3年課題研究オリエンテーション		

\*市立函館高校の資料より

する力を身に付けさせたいのです」

1年生の学問系統別学習では、興味・関心のある学問系統について、学ぶ内容や学べる大学、卒業後の進路などをグループで調べて発表する。優秀なグループのレポートは、学年全体の発表会でも披露する。大学進学に対する意欲を高めながら、情報収集能力や表現力を高めることも目的だが、他グループの発表を聞き、興味ある学問系統以外の分野にも視野を広げてほしいと考えている。

## 迷いながら小論文テーマを絞り込む過程を重視

総合学習のもう1つの柱は、表現力の育成。指導の中心は、1年次の小論文、2年次のディベート、集大成となる3年次の課題研究論文だ。

1年次の小論文では、国語科の協力を得て、原稿用紙の正しい使い方から始め、「ブレインストーミング」をしたり、「論文の構成と校正」など小論文の基礎を指導して1200字の小論文を執筆・発表させる(図2)。ディベートは、各クラス4つ

ずつ論題を提示してクラス予選を行い、代表チームによる学年ディベート大会を行う。発表を聞く生徒は全員、各チームの発表内容を評価し、ジャッジペーパーに記入する。最も重視するのは論理的思考力だ。

「論文発表では、いかに論理的に構成されているかという観点で評価するよう、指導を徹底しています。そのような視点を身に付けさせるため、ディベートの審判を生徒に任せることになりました。肯定側・否定側の意見を冷静かつ公平に聞き、主張の妥当性を判断する経験は、客観的な視点を養うのに役立つと考えました」(谷藤先生)

3年次の課題研究論文では、学びたい学問や就きたい職業にかかわる事柄を半年間、調査・研究し、4000字の論文にまとめて発表する。

論文作成・発表のプロセスは、論文テーマの設定↓レジュメ作成↓中間発表↓個人研究↓下書きの提出↓清書提出↓クラス発表会↓全体発表会となる。テーマは生徒が自由に決めるが、ここでつまづく生徒は多い。教師はある程度助言はするが、細かく指示はしない。

図2 1年生1、2月「小論文クラス発表会」の指導案

	学習内容	教師の活動	生徒の活動	留意点
アプローチ (2分)	本時の内容の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>スピーチの意義と心得について説明する</li> <li>話す態度と聞く態度の両方について助言する</li> <li>前回のスピーチの良かったところを挙げて、今日のスピーチに期待を持たせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スピーチする、または聞く準備をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>不必要に緊張させないよう、明るい雰囲気を作り出す</li> </ul>
課題設定 (3分)	課題提示	自分の意見を分かりやすく正確にかつ印象的にスピーチしよう。また、クラスメートのスピーチをよく聞き取り共感したり、批判したりしよう <b>パートⅠ～Ⅳ</b>		
課題の追求・解決 (40分)	スピーチ	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒と一緒にスピーチに聞かせる</li> <li>スピーチの終了した生徒の清書原稿を回収する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1人5分間のスピーチ</li> </ul>	
	生徒の相互評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>「評価シート」に記入を指示する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価シートに評価と感想を記入する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>記入時間を30秒程度取る</li> </ul>
定着・発展 (10分)	クラス優秀作品の決定	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価に影響しない範囲でコメントする</li> <li><b>Ⅳでは投票を行う</b></li> <li>評価シートを整理し、クラス代表にふさわしい優秀作品を選ぶように指示する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師の講評を聞いて、自分のスピーチに生かす工夫を考える</li> <li><b>Ⅳ回目</b></li> <li>評価シートを整理し、クラス代表に相応しい優秀作品に投票する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>投票用紙を使用する</li> <li>各クラス1人選出する</li> </ul>
	次時予告	<ul style="list-style-type: none"> <li>次回の日時内容を予告する</li> </ul>		

\*市立函館高校の資料より抜粋

「4月の段階で、アブストラクト(概要)まで絞り込むのが理想ですが、漠然としたテーマしか決まらない生徒が大半です。ただし、中途半端なテーマでは、4000字の論文は書けません。そのような生徒は、研究を進めるうちに必ず壁に突き当たり

ます。テーマ設定の甘さに自分自身で気付き、軌道修正することが、表現力や論理的思考力の向上に欠かせないプロセスなのです」(吉田先生)

6月末の下書き提出後も、自身の意志で書き直しをする生徒は多い。クラス代表の生徒の論文は『優秀作

品集』に掲載されるが、選ばれた後も掲載までに何度も追実験を行い、データの精密化を図る生徒もいる。

3 学年担任の星野朋己先生は、次のように語る。

「初めて課題論文の優秀作品集を読んだ時は驚きました。先生方の指導も大変だったと思います。しかし、実際に指導に当たってみると、調べ学習から始まる活動の中で、生徒は自らの力で成長していくことが分かりました。1 年次、2 年次で培った、調べる力、表現する力が論文という形で実を結んでいくのです」

## 「論文」の書き方を重視し 論理的思考力や問題意識を養う

論文指導で最も時間をかけるのは、論文の書き方そのものだ。レポートと論文の違い、テーマの決め方、導入の書き方、文章作成上の工夫、論証のテクニクなどを徹底的に指導し、論文とは何かを生徒にたたき込む。

「論文作成の過程で、社会への問

題意識や物事を批判的・多面的に受け止める力まで身に付けることを目標としています。ただ、3 年間でそれを実現するのは難しい。最低限、身に付けてほしいのは、大学で論文やレポートを作成するために必要な力です。どこに信頼できる情報があり、どのように集めるのか、どうすれば論理的に表現できるのか。自分で課題を見つけて解決できる力を『自立』というのならば、情報収集力や論理力、表現力の習得こそが、『自立』に向けた第一歩といえるのではないでしょうか」（谷藤先生）

同校の卒業生に対する大学の評価は高い。他校からの進学者に比べて、レポートを書き慣れている、調べたりまとめたりする力が身に付いているという声が、複数の大学教員から寄せられる。卒業生からの近況報告では、「総合学習での体験が大学でレポートや論文を書く際に役立っている」と伝えてくるといふ。生徒は高校を卒業して初めて、大学で学ぶ上で不可欠のツールを手に入れていたことに気付くのである。

## 明確な目的意識を持つて 大学を選ぶ生徒が増加

大学選択においても、総合学習での実践の意味は大きいようだ。

「03 年度に総合学習を導入する前と導入後の生徒では、明らかに大学選択に対する姿勢が違います。導入前の生徒は、まじめだけれども、国立・公立大ならどこでもよいという意識がありました。今はセンター試験の自己採点結果が第 1 志望校に届かない場合も、結果に合わせて志望を変えるのではなく、少しランクを下げてでも、同系統の学部・学科で頑張りたいという意思表示をする生徒は増えています」（辻田先生）

ここ数年、国公立大現役合格者数が道内順位 15 位以内で推移していることは、総合学習の影響であることは冒頭指摘した通りだ。論文を推薦入試・AO 入試に向けた準備ととらえ、希望進路と直結したテーマを選ぶ生徒も多い。以前はなかなか合格に結び付かなかった北海道大や筑波

大など、難関国立大の AO、推薦入試の合格者は確実に増えている。進路部副部長の門馬甲兒先生は、「総合学習に対する教師の評価が高いのは、総合学習が『理想の学び』を追求しつつも、大学合格に確実に結び付いている実感を持っているからだと思います」と話す。

今後の課題は、総合学習で芽生えた興味・関心を更に高める工夫だ。

「教科指導ならば、生徒にやる気が出てきた時点で、それぞれの生徒に合った勉強法や参考書をアドバイスできます。総合学習や進路学習についても、生徒が意欲を持って何らかのアクションを起こした時に、そのタイミングを逃さず、更に興味・関心をかき立てられるような指導が重要になるでしょう。例えば、小論文で自分の力を試したいという生徒にコンクールの応募を勧めるなどして、生徒の可能性を広げたい。今以上に生徒に対して的確な指示ができるよう、教師自身がアンテナを張って情報を得ることを、心掛けていきたいと思います」（門馬先生）

鹿児島県立甲南高校

# 「KIPプロジェクト」を核に 取り組みの連関を見直し 自立の芽を育てる

真の自立は、集団の中で自分が何をすべきか考えられること――。「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）で「KIPプロジェクト」を推進してきた鹿児島県立甲南高校の取り組みを紹介する。

## 生徒にはビタミン剤 教師には接着剤のプロジェクト

鹿児島県立甲南高校が、総合学習で「KIPプロジェクト（Konan Innovation Project）」を始めたのは、現行の学習指導要領が施行される2年前の2001年度のことだった。同校は、1980年代後半には、毎年400人前後の国公立大合格者を出していた。しかし、少子化による学級数・生徒数の減少に加え、私立の中高一貫校の台頭などにより、進

学実績も苦戦が続くようになった。

その復活の起爆剤として企図したのが、KIPプロジェクトだった。学習指導要領改訂に合わせて策定したSI（スクール・アイデンティティ）「地球規模でものを考えるリーダーの育成」を達成するために、「人間理解の深い生徒」「課題意識のある生徒」「自己表現できる生徒」を育てる進路学習である。

1年次は、「テーマ学習」「ディベート演習」「小論文コンクール」により、環境・福祉・少子化などのさまざまな社会問題について考察。2

年次は、各自が希望する学部・学科

別の「KIGグループ」をクラス横断で組織し、5、6人のグループによる学問研究、個人研究を進める。3年次は、これまで各自が探究してきた

テーマを論文（マスターピース）にまとめ、プレゼンテーションを行う。

これらの取り組みにより、学校の状態が大きく変わった。KIPプロジェクトが始まる前の数年間に現役合格者がなかった東京大・京都大の合格者が復活して進路実績が向上くと共に、09年3年生4月の進路志望調査では、5年前と比べて東京大志望

### 鹿児島県立甲南高校

◎1949年に旧・鹿児島県立第二鹿児島中学校と旧・鹿児島県立第二高等女学校が統合して発足。2001年度に「地球規模でものを考えるリーダーの育成」をSI（スクール・アイデンティティ）に掲げ、人間性・創造性・指導力など、国際社会で活躍できる資質を備えたリーダーの育成を目指す。

設立 1906（明治39）年

形態 全日制／普通科／共学

生徒数（1学年） 320人

09年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、北海道大、筑波大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、広島大、九州大、鹿児島大など267人が合格。私立大には、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大、西南学院大、福岡大など延べ164人が合格。

住所 〒890-0052 鹿児島県鹿児島市上之園町23-1

電話 099-254-0175

WEB PAGE <http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Konan/kh-flob/home.cgi>

者が1人から9人に、京大志望者は1人から15人へと、飛躍的に増えた。「とりあえず地元の大学へ」と言っていた生徒が、明確な志望を持って大学を選ぶようになったのだ。進路指導主任の黒木誠先生は、KIPプロジェクトの位置付けを次のように話す。「KIPプロジェクトは、生徒にとってはビタミン剤、教師にとっては接着剤の役割を果たしていると思います。学校の主食はあくまで授業ですが、進路学習によって生徒はほどうい栄養を摂取できます。教師にとって

は、90年代後半の苦しい時期の後に、試行錯誤しながらも職員団が取り組みを成功させようと努力することで学校内の連帯感を高められました」

## 1年次の実施内容を見直し 硬直化した進路観を広げる

学校改革の切り札として導入した



鹿児島県立甲南高校校長  
**鞍掛巳千治** Kurakake Michiharu  
教職歴36年。同校赴任歴1年目。「自分を深く見つけ、努力する生徒を育てていきたい」



鹿児島県立甲南高校  
**黒木 誠** Kurugi Makoto  
教職歴21年。同校赴任歴7年目。進路指導主任。「生徒には、学校で勉強することの意味を深く考えさせたい」



鹿児島県立甲南高校  
**福永幸成** Fukunaga Kosei  
教職歴21年。同校赴任歴5年目。1学年主任。「正しく自己肯定ができる生徒を育てたい」



鹿児島県立甲南高校  
**上ノ町友紀** Uenomachi Tomonori  
教職歴・赴任共に3年。総合学習統括。「自分の考えにこだわり、集団で個性を生かせる生徒を育てたい」

KIプロジェクトだが、8年が経過し、効果が上がりにくい場面が見られるようになった。

「今の生徒は、素直でまじめな半面、柔軟性がなくなっていると感じます。高校入学時点で『絶対に薬学部に進む』などと決めてしまい、頑として志望を変えようとしないう生徒も少なくありません。小・中学校で受けてきたキャリア教育の成果もあります

が、一方で、将来の志望が硬直化し、思い込んだら突き進んでしまう生徒が増えていいるのも事実です。さまざまな角度から学問や社会を見て、生徒自身が迷いながら、進路を絞り込むための指導の必要性を感じています」(黒木先生)

KIプロジェクトには、生徒の視野を広げる工夫が随所にある。例えば、2年次の「KIグループ」による課題研究では、志望する学問分野ごとに、クラス横断でグループを編成し学問について探究する。1学年主任の福永幸成先生は、その効果を次のように感じている。

「同じ学問を追究しても、生徒の

興味・関心の違いや情報源によって、別の視点や情報が得られることもあります。さまざまな価値観を持つ友だちと共同作業を進めることによつて新しい発見をしたり、視野を広げたりできます。こうした活動を今以上に深化させる必要があります」

1年次の夏休みに卒業生の職場を訪問する「先輩に学ぶ私たちの進路セミナー」も、視野を広げ、深く考えさせるという観点から見直した。

この活動は、毎年、約50人の卒業生の協力を得て、生徒が興味ある職業に従事している卒業生に自らアポイントメントを取り、職場を訪問する進路学習だ。職業に対する期待感や進路意識を高めるのが狙いだ。しかし、職場数に限りがあるため、生徒の希望通りにならずに「自分が行きたい職場ではなく、別の所に行かされた」と、かえって意欲が低下してしまう生徒が見られた。

これではそもその狙いは達成できないと考え、09年度は、仕事内容ではなく、先輩がどのように仕事にやりがいを見いだしているのか、社

会に貢献しているのかといった、先輩の「生き方」を聞く活動に変更した。「これしかない」と道を決めてしまつたら、もしその道を断られた時に、自分の人生は何だったのかと、自身を否定的にとらえてしまうことになりかねません。たとえうまくいなくても、それを正面から受け止め肯定できる力、挫折してもはい上る力は、自立には欠かせない要素です。職種の知識を得るためではなく、先輩の生の姿からプライドややりがいを持つて働くことの素晴らしさを学び取ってほしいと思います」(福永先生)

生徒のコミュニケーション能力の低下を感じて、改善した点もある。

09年度は、例年1年次の秋から行っていたディベートを、入学直後から始めた。まず、ディベート前に、生徒が具体的なイメージを描けるよ

ディベートで組織の中の自分の役割に気付かせる

## ディベートで組織の中の自分の役割に気付かせる

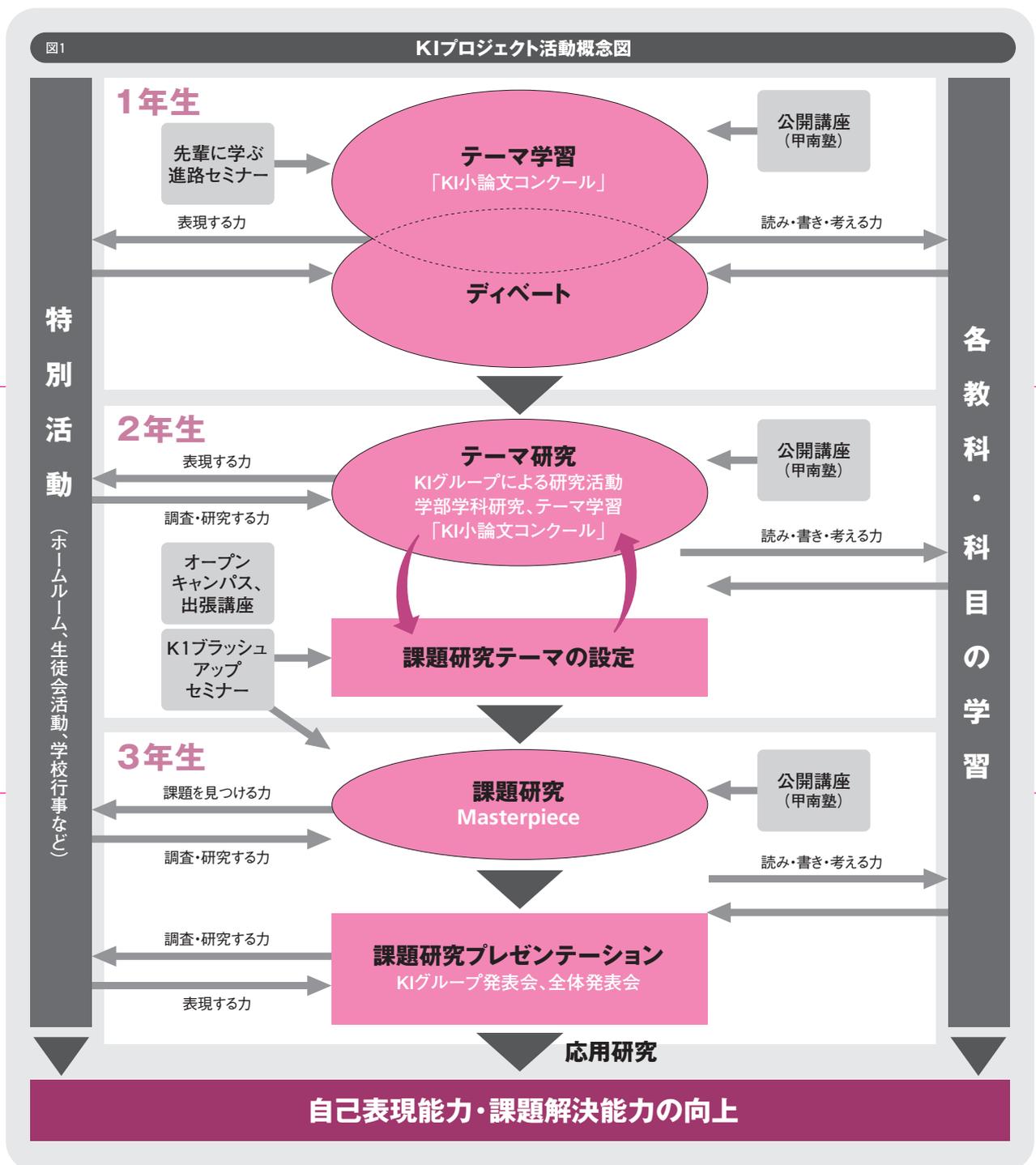
生徒のコミュニケーション能力の低下を感じて、改善した点もある。

09年度は、例年1年次の秋から行っていたディベートを、入学直後から始めた。まず、ディベート前に、生徒が具体的なイメージを描けるよ

うに、前年の3年生のディベートの様子をビデオで見せ、その上で実際に現3年生が行うディベートを見せた。その結果、1年生でも、わずかに2回のディベートで例年3学期に行っていたレベルの論戦が展開できるまでに上達したという。

ディベートは論理的思考力や表現力を鍛える絶好の場だが、それ以上に同校が重視するのは、生徒一人ひとりが自らの役割を自覚し、チームの中で何をすべきかを主体的に考えられるようにすることだ。その意味で、ディベートは生徒を自立に導くきっかけと位置付けている。鞍掛くらかか已な千治校長は、次のように説明する。

「社会のリーダーとして活躍する人材を育成することが本校の教育目標です。しかし、本当のリーダーとなるためには、自分自身のことだけでなく、周りの人たち、自分が属する組織、社会や国のために役立ちたいと願う奉仕の精神が必要ではないでしょうか。先生に言われなくても、きれいな環境にしようと率先して教室やトイレの掃除をする、駐輪場では他の人の邪魔にならないように自分の自転車を端に寄せる、とい



うことも立派な奉仕の精神です。デイベートなどの取り組みを通じて、自分も周りの人も幸せになれる社会にしたいと考えられる生徒を育てることが、我々の仕事です」

総合学習を統括する上ノ町友紀先生は、デイベートの成果を次のように話す。

「教師からの投げ掛けに、単語だけでなく、主語・述語を添えて返答する生徒が増えました。デイベートを繰り返すことによって、大人らしいコミュニケーションや会話に徐々に近づいていると感じます」

行事や部活動などに取り組む姿勢にも、デイベートの効果を感じることは多いという。

「デイベートでは、生徒自身が授業を動かします。そうした経験を積むことによって、行事や生徒会活動などでも、生徒は自分たちで主体的に動くようになります。デイベートを通して、組織の中での自分の役割を、具体的にイメージできるようにするのはないでしょうか。これらの生徒の変化を見ると、高1の1学

期という早い時期からデイベートを行ったのは、効果的だったと思います」(上ノ町先生)

## 取り組みの連関性を意識して 内容や順序を改める

デイベートさえ行えば、生徒のコミュニケーション力が高まるわけではない。かつては、デイベートで活発に意見を戦わせる生徒たちなのに生徒集会では消極的すぎて、教師がギャップを感じることも多かったという。その原因を「デイベートはデイベート、生徒会活動は生徒会活動と、取り組みを主導する教師が切り分けて考えていたから」と、黒木先生は分析する。

「一つひとつの取り組みはしっかりできていても効果が出ないのは、取り組みの連関性が弱かったからだと思います。KIPプロジェクトでも、それぞれの取り組みが相互に関連付けられたり、ほかの学校行事や授業に波及したりした時、ある

いは1〜3年次の連続性が保たれたときに、特に効果が表れていると感じます。3年間でのどのような生徒を育てるのか、学年団がきちんと目標を合わせ、個々の取り組みを単発で終わらせないよう工夫することが、進路指導を成功させる最大のポイントだと実感しています」

例えば、09年度の1年生では、「先輩に学ぶ私たちの進路セミナー」に先立ち、デイベートで「OB・OGを訪問するのは是非か」というテーマの論戦を行い、職場訪問について考えさせた。朝礼やLHR、学会などで生徒に語り掛ける場面でも工夫している。

「見えない自立の芽を育てようと、教師が常に意識することが大切です。例えば、教師が生徒集団に語り掛ける時も、『みんな』ではなく『君』に話しているのだと伝えます。みんなに話してしまうと、生徒はひとごとのように聞いてしまいがちですが、一人ひとりに語り掛けることによって、生徒は教師の話を自分のこととして受け止め、議題に対する自分自身の

意見を持つようになります。集団における自分の立ち位置や役割を考えきつかけとなり、自立にもつながっていくのではないのでしょうか」(福永先生)

KIPプロジェクトが一定の成果を収めた今、同校では原点に立ち返り、授業の質を見直そうという機運が高まっている。その理由の1つに、教科の魅力を高めることで幅広い学部・学科に興味・関心を広げられるのではないかとある。もう1つには、KIPプロジェクトによって醸成された高い進路志望を実現するには、質の高い授業で学力を引き上げる必要があるということだ。生徒の志望に見合った学力を付けなければ、KIPプロジェクト自体は単なる理想で終わってしまう。

KIPプロジェクトの個々の活動で芽生えた自立の芽を、授業で更に伸ばしていく。そうした取り組み相互の連関性を高め、教師自身が取り組み全体をコーディネートする力が、今後一層問われることになりそうだ。

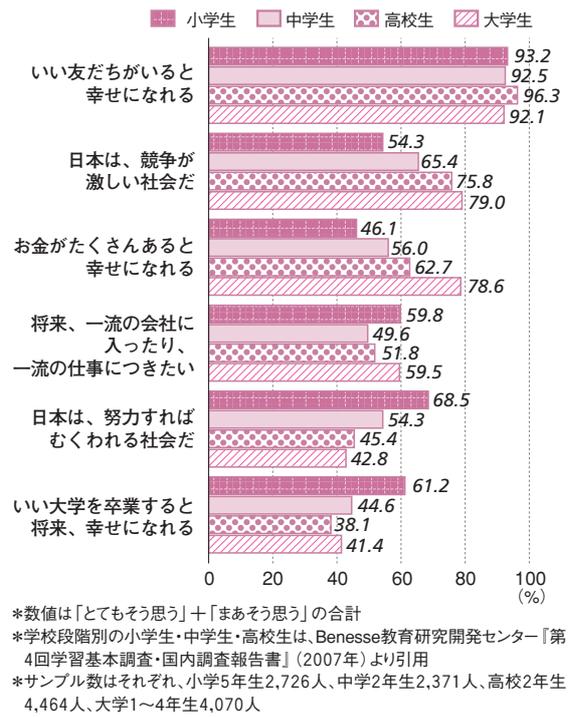
# 「日本は競争が激しい」と 厳しい社会認識を抱く大学生

Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

図1 大学生の社会観・就労観



図2 社会観（学校段階別）



出典◎「大学生の学習・生活実態調査報告書」/調査時期◎2008年10月/調査方法◎インターネット調査/調査対象◎18~24歳の大学1~4年生(ただし、留学生、社会人経験者を除く)/有効回答数◎4,070人

## 高校時代に志を育てる指導が必要

いい大学を卒業しても幸せになれない。日本の社会は競争が激しく、努力しても報われない——。大学1~4年生を対象に社会観や就労観について尋ねた結果だ。

図1を見ると、「日本は、競争が激しい社会だ」と約8割が思い、「日本は、努力すればむくわれる社会だ」と感じる者は5割にも達していない。「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」と答えたのは、4割程度だ。更に、図2を見ると、学校段階が進むごとに社会への認識が現実的になっていく様子がうかがえる。

これらの結果を見た高校教師は、「高校での進路指導の課題が見えてくる」と指摘する。「大学生になると社会に接する機会が増えて現実が一気に見え、アスピレーション(志)が冷やされている。高校時代に志を育て、社会への期待感を高めてから大学に送り出すべきだと感じた」と話す。

## 社会とのかかわりをじっくり考えさせる

明るい未来が描きにくい状況は、何事にも積極的になれない気質にもつながっていると推測される。学習への動機付けや進学意欲の高まりという観点からも、進路指導の重要性を指摘する声があった。「特に、将来を考え始める高校1年生に、外の世界を見たり、社会への見聞を広めたりしながら、社会と自分とのかかわりをじっくり考えられる機会をしっかりと確保することが重要だと思う。そうした指導をすることによって、難関大(志望校)に進学(合格)するということはどういうことなのか、生徒も考えられ、学習動機につながるのではないか」という。

「仕事を通じて社会に貢献することは、大切なことだ」と84.4%が答えている。大学生は、社会貢献の重要性を十分認識している。その気持ちを支える高い志を、高校時代にもっと育てていきたい。

調査の詳しい結果は Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください

ベネッセ 研究 で 検索

<http://benesse.jp/berd/>

静岡県立 **静岡高校**

## 初期指導強化

「成績が上がって最も喜ぶのは生徒自身です。  
最初は苦しくても  
生徒はやって良かったと思うはずです」

▶▶▶ P.20



# 指導**変革**の軌跡

そのとき教師は、そして生徒は  
どう変わったか



東京都・私立 **錦城高校**

## 進学実績向上

「指導の普遍的な課題を学校全体で共有することで、  
生徒の希望進路を実現させることにつながったのです」

▶▶▶ P.24

千葉県立 **姉崎高校**

## 学校再生

「小学校段階の学習内容から学び直しをさせたのは、  
生徒に達成感を感じてほしかったからです」

▶▶▶ P.28





◎「印高（高きを仰ぐ）」を校訓として、「勉強を本分とする」「人に迷惑をかけない」「自主的に行動する」を実践目標とする。伝統校らしく、長い歴史を誇る部活動が多い。1896年創設の野球部、1899年創部の水泳部、1904年発足のテニス部などが活躍している。

設立

1878(明治11)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約320人

09年度入試合格実績（現浪計）

国公立大には東北大、東京大、静岡大、浜松医大、名古屋大、京都大、大阪大など215人が合格。私立大には、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大など延べ582人が合格。

住所

〒420-8608 静岡県静岡市葵区長谷町66

電話

054-245-0567

Web Site

<http://www.shizuoka-h.ed.jp/>

静岡県立  
静岡高校

初期指導強化

# 「当たり前のこと」の徹底が学びに向かう姿勢を生み出す

変革のステップ

背景

◎生徒の主体性を重視する指導が通用しなくなり、難関大志望者が減少

STEP 1

実践

◎「課題提出」「追試」などを徹底し、模試の活用を推進。進路指導課が主導し、全学年で取り組みを導入する

STEP 2

成果

◎模試の結果が堅調に推移。東京大・京都大志望者は例年の倍になり、難関大を目指す生徒が増えた

STEP 3

生徒の意識の変化から  
初期指導を強化

学校現場において、「生徒が当たり前のことを当たり前に行う」のは簡単なようで難しい。この「当たり前のこと」を徹底し、生徒が前向きに学びに向かう姿勢を育んでいるのが、静岡県立静岡高校だ。

同校が初期指導を強化したのは、前・進路指導課長の鈴木孝司先生（現・清水東高校）の時代からだ。背景には、生徒の学力低下に対する危機感があり、実際に難関大志望者が年々減り、合格実績も決して高くはなかった。ただ、同校は旧制中学の系譜を引く伝統校であり、地域の信頼も厚く、目立った改革をせずとも成績上位層の生徒が集まっていた。伝統的に生徒の自主性を重んじる校風と相まって、教師が手をかけることによって、かえって生徒の主体性を損なうと考える教師も少なくなかった。

その風潮が、初期指導の強化によって「現状を変えよう」という意識に徐々に変化し、2007年度入学生（現・3年生）から本格的な改革に乗り出した。

この学年の指導において最も重視したのは、「当たり前」のことを当たり前にする指導だった。「課題は期日までに一定レベル以上の内容を確実に提出させる」ことを学年団で共有し、生徒にもその重要性を学年集会やLHRで繰り返す。

返し訴えた。進路指導課長の福田次郎先生は、次のように振り返る。

「学年色が濃い本校のような伝統校では、学校全体として改革を進めようとしても、なかなかうまくいきません。しかし、学年主任を中心として、学年団が一致団結して取り組み、校内の流れは変わります。当時、1学年主任の斎藤隆男先生（現・3学年主任）は、学年進路担当の鈴木健之先生（現・静岡東高校）、数学担当の山崎裕己先生と共に、当たり前のことを徹底する指導を率先して行い、新たな取り組みを次々と始めました。一見、強引にも見える手法ですが、かえって『自分たちも取り組まなければならない』という



静岡県立静岡高校  
**福田次郎** Fukuda Jiro

教職歴27年。同校に赴任して4年目。進路指導課長。「教師が結果を恐れず信じた道を進む限り、生徒が教師を裏切ることはない」



静岡県立静岡高校  
**斎藤隆男** Saito Takao

教職歴28年。同校に赴任して6年目。3学年主任。「生徒と共に、手を取り合いながら歩める学校を築いていきたい」



静岡県立静岡高校  
**山崎裕己** Yamazaki Hiromi

教職歴33年。同校に赴任して5年目。数学科担当。「生徒はやれば必ずできる。生徒の可能性を信じて、粘り強い指導を心掛けたい」

かの教師の意識を高めることにつながったと思います」

## 数学主導により 生徒の学びへの意識を高める

「当たり前のことを当たり前にする」という方針を最も徹底したのは数学だ。山崎先生の主導の下、生徒に負荷をかける指導を貫いた。「先手必勝」とばかりに、入学直後から矢継ぎ早に課題を与え、一途に勉強に打ち込む姿勢を定着させた。回収した課題はすべて、学年の数学科の教師が目を通し、一定レベルに達していない生徒には再提出を課した。単元ごとに行う確認テストは、一定レベル（65%程度）に達していない場合は、たとえほとんど全員であっても追試を行い、要求水準を下げることは決してしない。

当然、批判はあった。「これだけ数学で課題を出されては、ほかの教科の学習ができなくなる」「管理的な手法では、かえって生徒を駄目にする」。だが、山崎先生には確信があった。「模試などの結果を見ると、本校の課題は数学にありました。しかし、本校の生徒なら、方法次第で必ず成績は上がると思いました。成績が上がって最も喜ぶのは、生徒自身です。最初は苦しくても、生徒はやって良かったと思うはず。生徒は、数学の学習時間が突

出しても他教科をなおざりにすることはありません。むしろ、数学を通して高校の勉強はこういうものであるということを実感し、他教科についても同じように努力しようとするものです」

## 模試の徹底活用により 大学入試への意識を高める

模試の徹底活用も、この学年から始まった。それまで、クラス同士の比較などにとどまっていた模試活用を変えたのだ。

07年度1年生からは、目標の設定↓満点答案の作成↓模試分析という流れで、事前・事後の指導を徹底した。事前指導では、学校独自の「事前準備シート」（P.22図1）に、生徒が志望校や前回の模試の振り返り、今回の目標を記入する。目標は素点で設定。「A大合格にはあと○点、1教科に換算すると○点」と、目標と現在の実力との差を明確に意識できるようにした。

模試後は、白紙の解答用紙を配布し、もう一度、教科書や参考書、辞書を使いながら同じ問題を解き、満点答案を作成・提出させる。その後、解答解説を配り、自己採点をさせて再度提出させる。未提出者は放課後、監督教師の下で徹底的に指導を受ける。

受験結果を返却する際は、成績表と共に、教師の手による教科ごとの模試分析を示し、全国

模試の事前準備シート

図1

ON THE ROAD 2007 ROAD TO 2010  
2007年度静岡県立静岡高等学校 1年 第2回進研全国記述模試へ  
テーマ「高校学習の実力をチェック！1年後半学力測定」

1年 組 番 氏名

志望原	大学名	学部	学科・課程	ゾーン	3教科合計目標点
第1志望	大学	学部	学科・課程		/300
第2志望	大学	学部	学科・課程		/300
第3志望	大学	学部	学科・課程		/300
第4志望	大学	学部	学科・課程		/300

2 第1回進研学力総合記述模試(43.6万人受験・7月14日実施)での結果を書きましょう。

教科名	国語	数学	英語	合計
目標得点	/100	/100	/100	/300
校内順位	/327	/327	/327	/327
全国順位	/438130	/438130	/438130	/438130
全国偏差値				
ゾーン				

3 上記の志望大学に合格するために、11月3日実施、第2回進研総合学力記述模試では、  
①3教科合計で何点以上獲得するか②そのために各教科で何点以上獲得するか、目標点数を書きましょう。

教科名	国語	数学	英語	合計
目標得点	/100	/100	/100	/300
目標校内順位	/328	/328	/328	/328
目標全国順位	/445000	/445000	/445000	/445000
目標全国偏差値				
ゾーン				

【目標点数設定のデータ】 東大・京大・医学部 210点以上 難関大学 190点以上 一般公立160点以上  
全国順位は、東大・京大・医学部 4000番、難関大は10000番以内を目標にしよう。

生徒に志望校と目標点を書かせた上で、前回の模試の結果、今回受ける模試の目標を書く。目標と現状の差を生徒に認識させるのが目的だ

よりもできた分野、差がついた問題、授業で扱った時期などを伝え、「大学受験における1点の価値は、上位になるほど重くなる」と意識付けていった。斎藤先生は次のように話す。

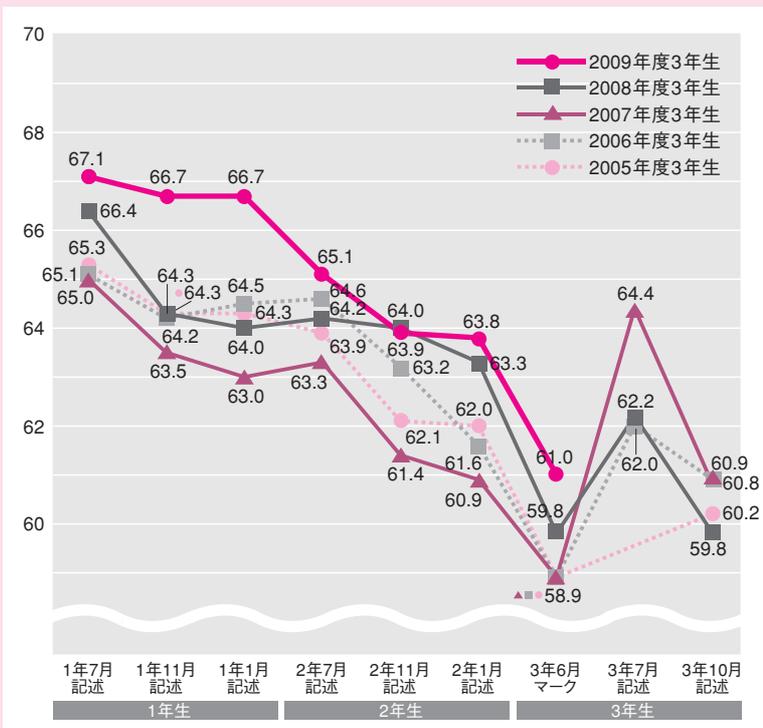
「満点答案の作成は、生徒だけでなく、教師も大変ですが、『模試はここまで活用する』という意識を低学年時から持たせることが大事なのです。また、かつては厳しく指導しようとしても、生徒がうつらうつら表情をしてい

るとつい手を緩めてしまい、指導が徹底されないことも少なくありませんでした。低学年時からすべきことにしっかりと取り組む姿勢を身に付けさせることによって、生徒には例年になりに粘り強さが見られるようになりました」

一連の指導により、同学年の模試成績は例年以上に堅調だ。例年、3年生6月の模試は下降線を描いていたが、この学年は3年次に大きく落ち込むこともなく底堅く推移している(図2)。

図2

05～09年度の3年生の進研模試成績推移(国数英総合)



成果の出た取り組みは  
他学年でも導入し、全校で共有化

同校では、進路指導課が主導し、成果の出た取り組みを学校全体で共有している。安定した進路実績のためにも、進路指導課がパイプ役となりノウハウの共有・平均化を促す必要がある。

まず、家庭学習時間記録シートを1、2年生で導入した。数年前の3学年団や現3学年団が

実施し、生徒把握に効果を上げていたからだ。家庭学習時間やその日の感想、反省を毎日記入、提出させ、担任がコメントを書いて返却する。今後は蓄積されたデータを入力して、学年・学級全体の傾向を把握し、課題発見や指導改善に活用する予定だ。

現3年生が2年次に参加した東京大オープンキャンパスは、09年度には6月に1、2年生合同で実施した。参加者は1年生106人、2年生65人と、予定の倍の人数となった。このオープンキャンパスは、大学主催ではなく、卒業生の東京大教員の協力を得て、同校だけを対象に講演会や研究室訪問、図書館見学を行うというもの。目玉は、同校卒業の現役東大生との交流会だ。パネルディスカッション形式で質疑応答を行い、その後、希望者が直接、先輩と懇談する時間を設ける。ほとんどの生徒が残り、食い入るように先輩の話に耳を傾けていたという。

「生徒は、教育、研究、設備、あらゆる面で東京大の良さを感じたようです。特に関心を寄せていたのは、進学振り分け制度でした。数学が得意な卒業生は、東京大で数学を極めるつもりでしたが、情報関連の科目の授業でコンピュータが面白くなり、計数工学を専攻しました。これも、3年次に専攻分野を決定できる東京大だからこそできること。進路に迷う生徒には、制度面の特徴が魅力的に映ったようです。また、先輩のさっそうとし

た姿に魅了され、東京大へのあこがれを一層強くした生徒も多かったです」（福田先生）

生徒の事後アンケートを分析すると、成績によって興味を持つ視点に違いが見られた。成績上位層は研究の内容、中位層は先輩との触れ合い、下位層は東京大への訪問自体の記述が多かった。今後は参加者のその後の学習時間の変化を追い、指導に生かしたいとしている。

09年6月に行った3年生対象の東京大・京都大合同説明会には、前年の倍の60人が集まった。2年前には4、5人であった難関大志望者対象の放課後講習も、09年度は約50人が参加した。

難関大志望者が増えれば、それに見合う学力を身に付けさせなければならない。09年6月には、教師の指導力向上のため、3年生の教師が中心となり、東京大、東京工業大、京都大、大阪大、静岡大など11大学の入試問題分析に取り組んだ。傾向と対策、お薦めの参考書、夏休みの勉強法などをまとめ、冊子にして配布。次年度以降も作成し、夏休みの家庭学習に活用させる予定だ。

### 「進路対策会議」で 定期的に他学年の情報を共有

学年ごとの自発的な改革も促進している。学年主任3人と進路指導課長の福田先生が進路室で「進路対策会議」を隔週で行い、各学年の取

り組みの狙いやノウハウを伝え合う。学年の課題について他学年の知恵を借りたり、進路指導課が入手した他校の指導事例や大学情報などを共有したりする。教科指導や進路指導だけではなく、生活指導や不登校などの話題に及ぶこともあるという。

「普段の会話からでは分からない他学年の実情が垣間見えることも、この会議のメリットです。他の学年はうまくいっているように見えるけれども、結構悩みは多いのだということが分かれば、自分の気持ちも楽になるものです。集まって愚痴を言い合っているうちに、取り組みのヒントが生まれることもあります。2週間に1回というのは、大変な面もありますが、前向きな改革につながるよう、活性化させたいと思います」（斎藤先生）

コーヒーを飲みながらリラックスした雰囲気の中で、約1時間、本音を言い合う。そうした井戸端会議的なスタンスが、08年度に始めてから形骸化することなく続いてきた秘訣でもあるようだ。09年度からは教務課長も加えて、学習指導要領に伴う教育課程の改編について話し合う場にもなっている。

「今、行っている改革は、すべて挑戦です」福田先生はそう話す。県内屈指の伝統校が、挑戦者として変革に挑み続けた2年半。回り始めた改革の歯車は、今後も止まることはないだろう。



東京都・私立  
錦城高校

進学実績向上

# 「2年生の大切さ」の共有が進路実現の後押しとなる

◎福沢諭吉の高弟である矢野龍溪が三田の慶應義塾内に創立した「三田英学校」が前身。のちに神田錦町へ移転し「錦城学校」と改称、1963年に現校地に移った。97年度、男子校から共学校とした。「知性・進取・誠意」を校訓とし、進取の精神で知性を磨き、誠意ある人間となることを目標としている。部活動が活発で1年生の加入率は99%。

<b>設立</b>	1880(明治13)年
<b>形態</b>	全日制／普通科／共学
<b>生徒数</b>	1学年約500人
<b>09年度入試合格実績(現浪計)</b>	国公立大には北海道大、筑波大、埼玉大、電気通信大、東京工業大、首都大学東京などに48人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ1399人が合格。
<b>住所</b>	〒187-0001 東京都小平市大沼町2-633
<b>電話</b>	042-341-0741
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.kinjo-highschool.ed.jp/">http://www.kinjo-highschool.ed.jp/</a>

変革のステップ

背景

◎模試の活用や教師の意識統一が課題に。好調な進路実績を維持しつつも攻めの改革を継続

STEP 1

実践

◎「進路情報交換会」で教師間の目線合わせとノウハウの共有を実現。模試の活用、データに基づいた指導を徹底する

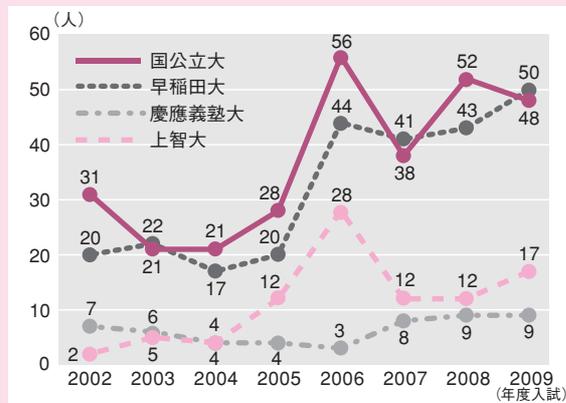
STEP 2

成果

◎十数年で国公立大、早慶上智の合格者はいずれも2倍増。09年度入試では過去最高の実績を上げる

STEP 3

図1 合格実績の推移(過年度生含む)



2003年度入学生が受けた2006年度入試を境に、合格実績は大幅に伸び、以降、安定した実績を推移

錦城高校は、毎年、難関私立大に述べ数百人が合格する私立の進学校だ。特にここ10年での変化は著しい。2009年度入試の合格者数は、7年前の02年度入試と比べ、早稲田大で20人から50人、上智大で2人から17人と増加している(図1)。08年度卒業生の3年次6月の進研マーク模試の結果を過年度と比べても、国英地歴公民の総合偏差値が、98年度卒業生46・0に対して08年度には58・2、数英理の場合も10ポイント以上も伸びている。

躍進のきっかけは、97年度の男女共学化だ。

共学化、都立校の学区撤廃で  
好調な進学実績を堅持

男子校時代には志望を貫くには浪人も是とする  
雰囲気があったが、女子が入り現役志向の生徒  
が増えたことよって、生徒の進学に対する姿  
勢が変わり始めた。

更に、03年度に都立校の学区が撤廃となった  
影響も大きかった。近隣の難関都立高校の併願  
者が入学するようになり、例年500人程度の  
入学者が03年度は700人を超えた。その生徒  
が卒業した06年には、国公立大・早稲田大・上  
智大の合格者数が共に前年の倍以上となったの  
だ。



### 梶原政利

Kajiwara Masatoshi

錦城高校校長  
教職歴・赴任歴共に38年。「本気になれば、自分  
と未来は変えられる」ということを生徒に伝えた  
い



### 大音雅克

Ooto Masakatsu

錦城高校  
教職歴・赴任歴共に27年。進路指導部長。「生徒  
のために、生徒と共に、という気持ちをお忘れな  
うにしたい」



### 佐藤典生

Sato Norio

錦城高校  
教職歴・赴任歴共に26年。1学年担任。「生徒の  
立場に立った、分かりやすい授業を展開したい」



### 福石さくら

Fukushi Sakura

錦城高校  
教職歴13年。同校に赴任して12年目。進路指導  
部。「生徒が楽しいと思える授業をした」

## 春の「進路情報交換会」で ノウハウの共有を促進

躍進の理由は、外的要因によるものだけでは  
ない。学校全体で課題を共有し、教師が足並み  
をそろえていく上で、大きな役割を果たしてい  
るのが、毎年4月に行われる「進路情報交換会」  
だ。新旧3学年団の引き継ぎを目的として始め  
られたが、数年前から、旧3学年団と全学年の  
教師で情報提供・質疑応答を行う場となった。

最大の特徴は、旧3学年担任に詳細なアンケ  
ートを取り、回答を他学年の学年運営にも生か  
してもらった点だ。入試を終えたばかりの3学年  
団に、「面談を実施した時期とポイント」「進路  
指導で留意した点」「自分のクラスの入試結果  
についての講評」などを聞いてまとめ、交換会  
までに配布。会では、旧担任が所見を述べ、他  
学年の教師からの質問に答える。

このアンケート結果こそ、同校のノウハウの  
集積だ。例えば、「良い結果を残した生徒はど  
ういう状態だったか」という問いに対し、多く  
の教師が「1年生から授業にまじめに取り組ん  
でいた」「2年生から自分の志望を持っていた」  
と答えた。「3年生までに英語の偏差値が65以  
上になれば、早稲田・慶應・立教は合格でき  
る」といった回答には、生徒の実態を踏まえた  
教師の入試に対する的確な分析眼がうかがえる。  
逆に、「結果が出なかった生徒は何が問題だ

ったのか」の問いに対しては、「受験準備のス  
タートの遅さ」に加え、「規則正しい生活習慣  
が身に付いていなかった」というような課題を  
提起する教師が多かった。「一般入試について  
感じたこと」には、「入試の多様化が進んでい  
るので、その生徒に合った入試形態を選ばせる  
ことが大切」「A大は公募制推薦入試が入りや  
すく、一般入試は厳しくなった」といった回答  
が寄せられた。

教師は経験を直接伝え、他学年とも共有する  
ことよって、入試傾向を肌で感じると共に、  
指導の普遍的な課題にも気付くのである。

## 「2年生の大切さ」を 教師間の共通意識として持つ

「進路情報交換会」は、教師間の目線合わせ  
の場にもなっている。

同校は、07年度入試で苦戦を強いられた。国  
公立大合格者は前年の56人から38人に、早慶上  
智は75人から61人に落ち込み、MARCH（\*）  
の合格者数も減った。この学年も例年通り、部  
活動の影響で本格的な受験勉強への取りかかり  
は早くなかったが、受験期が近づくと、生徒は  
本気で勉強に臨んだ。ところが、いつもの3年  
生のように成績が伸びず、前述の結果となっ  
た。なぜ追い上げが利かなかったのか。

2年生からこの学年の担任をした福石さくら

\*MARCHは、明治大(M)、青山学院大(A)、立教大(R)、中央大(C)、法政大(H)を示す

先生は、模試の結果や面談で得た情報などを基に原因を追究した。すると、2年生での過ごし方に問題があったのではないかと考えられた。

「2年生の担任になってしばらくして感じたのは、これまでの生徒に比べて学習習慣が定着していないということでした。それは、模試の成績にも如実に表れていました。2年時の成績で、受験期の伸びはある程度予想できるものです。つまり、2年生で怠けてしまうと、3年生での追い込みが利かない。その法則を、06年度卒業生が見事に体现していたのです」（福石先生）

2年生の過ごし方が大切……。この考え方を周知徹底する上でも、「進路情報交換会」は大いに活用された。08年度に3学年主任を務めていた佐藤典生先生は、次のように指摘する。

「合格実績の落ち込みを経験した福石先生が『2年生が大切』と繰り返し強調したことで、多くの先生が気を引き締めました。2年生といえど『中だるみ』が問題になりませんが、こうした構造的な問題としたらえ方では、どの学校でも避けられないと思います。しかし、『2年生が大切』という前向きな言い方により、多くの教師が解決可能な課題として受け止められたのではないのでしょうか」

08年度卒業生が早慶上智合計の合格者数で過去最高の実績を挙げられたのは、早い段階で教師の意識統一を図っていったからだろう。

## 模試の有効活用とデータに基づく指導

ここ十数年で、模試の活用に対する教師の認識も大きく変わった。かつては、模試に対する意識が低く、「実力テストなのだから、実力でやらせればよい」という教師もいた。模試の準備、振り返りなどは一切していなかったという。

今はすべての模試（1・2年生各4回、3年生6回）で、生徒に「目標・自己採点シート」を記入させている（図2）。2年生1月の進研記述模試の場合、「進研記述模試の目標」に、志望校や前回模試を基にした目標点、弱点克服のための対策などを記入。それを実現させるためのスケジュールを1日単位で作成する。結果が返ってきたら、「模試自己採点シート」に今後力を入れる教科、目標点、達成するための方策などを書かせる。教科担任は、学年全体の結果に基づく分析を公表し、「うまく解答できない生徒は、自分の語彙力を振り返ろう」（英語）、「漢文は漢字の読み、現代語訳などすべてで全国平

図2 模試の「目標・自己採点シート」

目標と結果だけでなく、シートの裏面には、次の模試に向けた学習計画を、1日単位で教科ごとに書き込めるようになっている。すべて生徒自身に記入させ、自ら計画を立てて学習するよう促す

均を下回る。1年次の学習の総復習が急務」（国語）など、学習の指針を与える。

模試活用が活発になるにつれ、模試結果を中心としたデータに基づく指導が根付いた。進路指導部長の大音雅克先生は、次のように話す。

「職員会議も『進路情報交換会』も、あく

までデータを基に、良いところは評価し、課題に対する対策をしっかりと立てさせるように心掛けています。会議や模試分析などを通して、教師間にデータ重視の姿勢が浸透していると感じます。特に3年生担任はパソコンを持って面談に臨み、蓄積したデータを見ながら生徒個々に指導しています。客観的なデータに基づくアドバイスは、生徒に対して説得力があることを肌で感じているのでしょう」

## 主体的な学びへ導く声掛けが好調の秘訣

教師間の目線合わせ、詳細な生徒把握により手厚い指導を心掛ける同校だが、手取り足取りの指導に終始しているわけではない。生徒の主体性を引き出すことにも努めているのだ。1年生では英数国に重きを置き、課題を多く与えて徹底的に学習習慣を身に付けさせるが、2年生後半からは、課題を徐々に減らし、自主的に取り組むプリントの比重を増やしていく。3年生には、全教科で毎週、課題プリントを廊下に置くだけで、生徒が自主的に取り組むようになる。「課題を強制しなかったことが良かったのだと思います。毎週、『新しい課題を用意している』と繰り返し言い続けたところ、2年生の後半に、生徒の方から課題をやらせてくださいと言ってきました。生徒の意欲を刺激

しつつ、教材をタイミングよく出すことによつて、主体的な学びに導くことができたと思います」(福石先生)

07年度以降、「2年生が大切」という意識で指導に当たってきたが、そうした状況でも、課題を強制するのではなく、主体性を引き出すような声掛けをしてきた。その一方で、成績下位層もしっかり支えた。どの教科もテストが終われば必ず追試を行い、できるまで徹底的に指導する。梶原政利校長は、次のように語る。

「本校は、成績下位層もしっかり面倒を見てきた学校です。難関大に着実に生徒が合格するようになった今も、絶対に落ちこぼれを出さないという教師の思いは強くあります。放課後や土曜日に校内を歩いていると、必ず生徒と教師が話している場面を見かけます。徹底した補習が行き届いているのです。『錦城は特進コースに入らなければ難関大合格は無理』という評価が定着すれば、本校は生き残れなくなるということを、教師一人ひとりが意識しているからでしょう」

常に危機感を抱きながら日々の指導に当たる教師の意識が、同校の躍進を支えている。

## 早い時期から生徒を「受験生」にさせる指導を模索

今後の課題は、今以上に早い時期から受験生

としての自覚を持てるように、生徒のモチベーションを高めていくことだ。

「ほぼ全員の生徒が大学進学を目指すため、3年生になれば自然と勉強するようになります。ただ、更に伸ばすには、もう少し早い段階でスタートを切れるよう、生徒のやる気を高めさせる必要があります。そのために、08年度から、卒業生の合格体験記とは別に、一般入試で合格した3年生に、1・2年生に対して合格体験談を話してもらう取り組みも始めました。普通コースにも、東京大を志望するような成績上位層の集団をつくり、クラスを引く張ってもらうというような工夫も考えています。あらゆる角度から生徒を刺激していきたいと思います」(大音先生)

好調な進路実績に安住せず、積極的に「攻め」の改革を展開する錦城高校。その姿勢の背後には、生徒一人ひとりに充実した高校生活を送ってもらいたいという思いがある。

「生徒一人ひとりが、本校を卒業して良かった、あの先生に出会えて良かったと思えるようにすることが、何よりも重要です。そのためには、志望を実現させると共に、クラブ活動や課外活動など学校のあらゆる場面で、生徒一人ひとりが活躍できる場をつくり出すことが大切です。多くの生徒が充実感を得られるようになれば、進路実績はおのずと付いてくるのではないのでしょうか」(梶原校長)



○「高い知性」「豊かな徳性」「健全な身体」が校訓。生徒一人ひとりが夢や目標を持ち、学習することの楽しさ、大切さ、素晴らしさを再発見する学校を目指す。2003年度に千葉県の「自己啓発指導重点校」の指定を受ける。徹底した生徒指導ときめ細かな学習指導を両輪とする改革で、学校再生を果たした。

設立

1978 (昭和53) 年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約160人

08年度進路実績

4年制大には、東京情報大、城西国際大、帝京平成大、東京成徳大、清和大、和洋女子大など延べ10人が合格。短大は3人、専門学校は28人が合格。就職者は、民間企業56人、公務員1人。

住所

〒299-0111 千葉県市原市姉崎2632

電話

0436-62-0601

Web Site

<http://www.chiba-c.ed.jp/anesaki-h/>

千葉県立  
姉崎高校

学校再生

# 小学校段階から始める 「学び直し教材」で 生徒の学ぶ意欲が育つ

変革のステップ

背景

○少子化と志願者の市外流出で受験者数が減少。生徒の問題行動が頻発し、地域の信頼は低下。退学者が年間100人を超える

実践

○徹底した生徒指導と基礎基本の習得を目指す「マルチベリック」による学習指導で、生徒の規範意識と学習意欲を育む

成果

○生徒の問題行動がなくなり、志願倍率は2倍に。生徒の意欲も向上し、更に上の進学先を目指すようになる

志願者数の減少と共に  
生徒の問題行動が恒常化

校門から昇降口に至る通路の花壇には、生徒が植えた花が咲き誇り、教室や廊下は整然として、ゴミ一つ落ちていない。生徒の服装や頭髪には清潔感があり、校外からの訪問者にもあいさつを欠かさない。教室では、生徒が私語や居眠りをせず、真剣にプリント課題に向かう。

「3年前には考えられなかった光景」と、千葉県立姉崎高校の教師は口をそろえる。年間100人余りの退学者を出し、「県内一荒れた学校」といわれていただけに、教師の感慨はひとしおだ。

同校は、市原市の人口増加に対応して、約30年前に開校した。1980年代半ばには、全校で30クラスの大規模校へと拡大。陸上部や書道部などが全国大会に出場、進学面でも国公立大や難関私立大の合格者が輩出するまでになった。

生徒増を追い風に発展を続けた同校だが、少子化の影響を受け、その後、成長に陰りが見え始める。隣接する千葉地区や木更津地区の高校が人気を集める一方で、同校の志願者は次第に減っていった。それに伴い、目立つようになったのが、生徒の問題行動だった。頭髮や服装は乱れ、校舎にはゴミが散乱、始業のチャイムが鳴っても教室に入らず廊下で騒ぎ続けていた。登下校中の喫煙や最寄り駅での座り込みにより、

地域住民とのトラブルも絶えず、連日のように苦情が寄せられた。地域からの信頼は失われ、2003・04年度と連続で定員割れとなった。

## 正門にテントを張り 徹底的な校門指導を展開

転機は03年11月に訪れた。生徒指導の徹底によって学校の再生を目指す、千葉県の「自己啓発指導重点校」に指定されたのだ。渡邊啓之教師は、当時の状況をこう振り返る。



千葉県立姉崎高校教師  
**渡邊啓之** Watanabe Hiroyuki  
教職歴27年。同校に赴任して2年目。「生徒の笑顔あふれる、呼吸の合った、楽しい授業を実践していきたい」



千葉県立姉崎高校  
**米山 茂** Yoneyama Shigeru  
教職歴23年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。「物事は必然。客観的なデータに基づいた多面的な考察を大切にしたい」



千葉県立姉崎高校  
**御園生洋一** Misonou Yoichi  
教職歴21年。同校に赴任して5年目。教務主任。「何事にも好奇心を失わず勉強していきたい」



千葉県立姉崎高校  
**平野善彦** Hirano Yoshihiko  
教職歴19年。同校に赴任して5年目。生徒指導主事。「生徒の自立と自律を促し、生徒自らが考える授業を実践していきたい」

「初めての定員割れに加え、退学者が100人を超えたことが新聞に取り上げられ、到底の状態になりました。すべての教師が『このままではいけない』という危機感を抱き、指導に当たっていました。退学者を減らすとするとあまり、学校にこない生徒にばかり目を向けていました。校内の指導に目が行き届かないという悪循環に陥っていたのです」

県の教育事業の指定を受け、更に、04年度には生徒指導の実績を持つ白鳥秀幸校長（当時）が赴任。強力なリーダーシップの下、全校一丸となって改革に当たる体制が整った。改革の柱は、徹底した生徒指導と、学校設定教科「マルチベースック」による基礎学力の定着だ。

生徒指導は、校門指導から始めた。正門にテントを張り、毎日朝8時から6限終了まで、教師が交代で校門に立ち、服装・頭髪指導を徹底した。服装や頭髪の乱れた生徒には直してから登校するよう促し、校門前に座り込む生徒は無理やり帰した。遅刻や授業中の問題行動に対しては、「問題行動指導カード」で警告し、累積5枚で特別指導の対象とした。

教師間の指導の差を少なくしようと、「授業マナー巡回指導」も取り入れた。授業中に居眠りや私語、飲食、化粧などをしている生徒がいれば、巡回の教師が教室に入って厳しく指導した。この方法に対しては、「授業中のことは、授業担当者が指導すべき」という意見も出され

たが、あまりにひどい状況であれば、体面や原則論にこだわることなく厳しく対処すべきという声が多数を占め、実施に移された。

まさに、全校を挙げての「聖域なき生徒指導」が展開されたのだ。

## 無力感にさいなまれながらも 教師間の団結で前進

教師は断固とした態度で指導に臨んだが、一朝一夕で改善されるものではないのが生徒指導の難しさだ。指導に従わない生徒と相対する中で弱気になることもあったと、05年度に赴任した生徒指導主事の平野善彦先生は打ち明ける。

「私が赴任してすぐ担任となった3年生は、『重点校』に指定された時に2年生だった生徒です。2年生になったらいきなり指導が厳しくなったという経緯もあり、3年生になっても教師の指導に耳を傾けない生徒が多かったです。1クラス約20人の5クラスの学年で、全クラスの授業を担当していましたが、毎日、注意と指導をするばかりで、授業らしい授業をすることができた日はほとんどないほどでした。そんな徒労感と無力感から教員生活の中で初めて学校に行きたくないと思いました」

平野先生に限らず、心身共に消耗する教師は多かったです。それでも教師を前に進ませた力は、校内の結束だ。教務主任の御園生洋一先生は、

厳しい現実があったからこそ結束できたと話す。「定員割れというどん底を見たことが、かえって『一致団結しよう』という共通意識を生みました。更に、地道に指導を積み重ねていく中で、学期ごと、年度ごとに、生徒の意識が確実に変わっていることを肌で感じました。その実感が、改革に対する教師の意欲を更に押し上げていたと思います」

カバンを持たずにベクトルだけを持って登校する生徒は姿を消し、年間延べ1万8千人を超えていた遅刻者数も08年には延べ千人台にまで減った。08年度には巡回指導を行わなくても、秩序ある授業が成立するまでに生徒の態度は改善されていた。

「就職した卒業生からは、『社会に出ると、つらいことがたくさんあるけれど、高校時代に厳しい指導を受けてきたので頑張れます』  
『就職して先生の言っていたことがよく分かりました』といった声が寄せられています。これまでの指導が間違っていなかったということを確認できました」（平野先生）

## 1学級3人のTTTで 手厚い「学び直し」の授業を実施

指導の二つ目の柱は、学校設定教科「マルチベーシック」による手厚い学習指導だ。教科ごとにプリントを作り、生徒個々が自分のペース

で取り組む授業だ。プリントには小・中学校段階の問題も出し、反復練習による基礎学力の定着を図った。進路指導主事の米山茂先生は、「学び直し」を取り入れた狙いを次のように話す。

「多くの生徒が基礎学力に乏しく、授業に集中できる時間も15分程度。学習で褒められ、達成感を味わったりした経験もほとんどありません。こうした生徒には『自分にもできた』『やって良かった』という達成感が

必要なので、小学校の内容から学び直して、高校に必要な基礎学力を定着させ、生徒の学習意欲を高めようとした、と聞いています」

対象は1〜3年生の全生徒。英・国・地歴・公民が週1時間、数・理は隔週で1時間実施する。授業は1学級につき3人の教師が担当し（教科担当2人、学習態度の注意・評価担当1人）、課題プリントに取り組む生徒を個別に支援する。「自己啓発指導重点校」に指定され、5人の教師が加配されたため、手厚い指導が可能となったという側面もある。授業態度を改善させるための指導については、人事交流で着任した中学校のベテラン教師が大きな役割を果たすなど、人的資源を生かした指導体制を整えた。

## 「わんこそバ方式」により 生徒の達成感を刺激する

最も工夫したのは、課題の出し方だ。取り組

みを始めた当初は、1回の授業でB4判のプリント1枚に取り留ませていた。ところが、分量が多すぎて集中力が持続せず、生徒の学力差にも対応ができないことが分かった。そこで、04年度の2学期からは、プリントをA5判表裏に変更。10〜15分で終わる分量を1ステップとして、基礎・標準・応用の3段階の教材を準備した。1ステップが終了すると、次のステップに進める方式だ。

「本校ではこれを『わんこそバ方式』と呼んでいます。生徒の学力によって取り組む分量が明確になり、生徒自身が自分の得意、不得意を的確に把握することができました。また、1回の問題数が減ったことで、満点を取りやすくなりました。1ステップが終わる度に『よくやった』と褒め、生徒が達成感を得られるようにしています」（御園生先生）

あくまで生徒の学習意欲向上の取り組みという前提に立ち、評価方法も工夫した。テストの得点ではなく、生徒が取り組んだプリントの量による評価を6割、出席率や取り組む態度の評価を4割とし、努力すれば報われる仕組みを重視した。

「マルチベーシック」により、生徒の授業態度は大きく変化した。渡邊教頭は、授業規律や学習態度を育む場になったと述べる。

「『マルチベーシック』では、一つの授業に3人の教師が入るため、生徒は課題に集中せ

図1

学習診断カルテ (生徒用)

マルチベーシック診断カルテ英語1 (1) 【生徒用】		氏名 ( )		( ) ( ) ( ) ( ) ( )								
実施日	学習内容	評価										
1	アルファベット① アルファベットの構成とローマ字	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
2	アルファベット② アルファベットの構成と英単語に慣れる	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
3	アルファベット③ アルファベットの構成と英単語に慣れる	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
4	単語の綴り①	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
5	単語の綴り② [r-] と [s-]	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
6	単語の綴り③ [t] と [d]	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
7	単語の綴り④ 短縮した単語	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
8	単語の綴り⑤ [o-] と [u-]	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
9	単語の綴り⑥ 綴り表、人名代名詞の形態と目的語	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
10	単語の綴り⑦ 綴り表	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
11	単語の綴り⑧ 綴り表、名詞の複数形の構文①	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
12	単語の綴り⑨ 名詞の複数形の構文	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
13	単語の綴り⑩ [e-] と [i-]	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
14	名詞の複数形① -s, -esの付く場合	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
15	名詞の複数形② 綴り表の単語	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
16	単語の綴り⑪ 綴り表の単語、名詞の複数形	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
17	代名詞の単数と複数 綴り表をつける。名詞の複数形	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
18	三単現の～s① 個人、人稱の考案、～sの付く場合	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
19	三単現の～s② 名詞の人称を私用する。	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
20	三単現の～s③ [i]と[s]と[er]を有する三人称、人称代名詞	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
21	三単現の～s④ 綴り表と綴り表に慣れる①	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
22	綴り表① 綴り表に慣れる①	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
23	綴り表② 綴り表の読みと基本動詞表	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
24	綴り表③ 綴り表の読みと名詞に動詞を照らす2つの辞書	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏
25	6.6 綴り表 基本動詞表と人称代名詞の綴り表	未評価	S1・表	S1・裏	S2・表	S2・裏	S3・表	S3・裏	S4・表	S4・裏	S5・表	S5・裏

生徒は、自分自身の学習内容を記入して学習状況や弱点を把握する。教師は、指導計画や教材の内容を明確にして評価に役立てる

ざるを得ず、おのずと忍耐力・集中力が身に付きませす。そうした授業態度が通常の授業にも波及して、学校全体が落ち着いた雰囲気になりました。『マルチベーシック』は、すべての授業の基礎になるトレーニングの場なのです」

自学自習を繰り返す中で、主体的に学習に参加する態度も養われている。英語の授業では、分からない単語があったら、全員が自分で辞書を引くようになった。また、教師が次のプリン

トを渡すと、生徒から「ありがとうございます」と返ってくるようになった。教師に支えられているという思いが、自然と感謝の言葉となって表れるようになったのであろう。

生徒の意欲や学力の向上に伴い、「マルチベーシック」の方法も変わりつつある。ステップ1〜3を30分程度で仕上げてしまう生徒が出てきたため、ステップ4、5とより高いレベルの課題を作った。教科によっては、SPIや各種資格試験対策のプリントを用意し、希望進路別

の学習にも対応している。

志願倍率2倍を記録  
劇的な学校再生を果たす

06年度の高校入試で、同校の倍率は2倍を記録。進学希望者も増え、生徒の進路選択の基準は「入れる大学」から「入りたい大学」へと変わった。5割強だった高校卒業時の進路決定率も、今では8割になった。しかし、課題もある。

「生徒の志望レベルが高くなり、実際の学力レベルとの差が生じています。褒めて自信を付けさせる指導だけでは、生徒の多様な志望を実現させるのは難しい。新たな展開が必要だと感じています」(米山先生)

今後、確かな基礎基本の定着を図るために「マルチベーシック」をいかに工夫改善するかが大きな課題だ。

「13年度に全面实施となる高校の新学習指導要領では、スパイラルに学び直す学習プロセスが強調されています。ここに、『マルチベーシック』をどうリンクさせていくかということが大きなポイントになると考えています。目の前の生徒の成長を正確に把握し、今後の教育課程全体の中での位置付けを考えていきたいと思っています」(渡邊教頭)

困難校からの再生を果たした自信を胸に、教師たちは新たな第一歩を踏み出そうとしている。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。  
2009年2月号指導変革の軌跡「東京都立小平西高校」、2007年10月号特集「生徒を大人にする『生徒指導』」など  
▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)

# 1年生秋の中だるみ対策と「第一歩」としての文理選択

高校生活にも慣れてきた一方で、夏休みの雰囲気から抜けきれない1年生秋。学習・生活習慣を立て直し、来るべき文理選択に備えるためにどのような指導が求められるのか。生徒の現状をベースにした無理のない取り組みを考える。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです

生徒が易きに流れないために

図1 生活習慣をリセットする



月/日	起床	就寝	学習時間												
			17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	24:00					
9/1	7:00	23:00													

確認しよう

- 起床、就寝、自宅学習開始の時間はいつも決まっているか
- 自宅学習は4月に決めた目標通りの時間、科目バランスになっているか

図2 逆転合格した先輩の足跡



進学大	1年11月 国数英総合SS	3年11月 国数英総合SS	ポイント
〇〇大 法学部	52	63	野球部員。1日1時間ずつの数学、英語の予習だけは欠かさず続けた。部活動引退後の3年10月から成績がアップした
△△大 工学部	48	65	吹奏楽部。部活動で放課後に勉強時間を確保するのが難しかったため、毎朝1時間半早く登校して、授業の準備をしていた
◆◆大 農学部	45	59	入学時から英語、数学が苦手。授業の疑問はその日のうちに必ず職員室に行って質問。2年3学期から徐々に成績アップ



4月に伝えた「高校生としてのルール」を再徹底する

教師自身が再徹底するために

図3 見逃してはならない生徒の変化の兆候を再確認する



- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| ・遅刻、欠席、早退が増えた   | ・授業中に居眠りをしている  |
| ・夏休みの課題が未提出     | ・頭髪や服装に変化が見られる |
| ・保健室に通う回数が増えた   | ・部活動をやめた       |
| ・携帯電話をいつも気にしている | ・教師と目が合った際、そらす |
| ・持ち物が華美になった     | ・言葉遣いが横柄になった   |

図4 教師自身の「授業点検」と生徒の「自己点検」を擦り合わせる



教師自身による授業点検		生徒自身による自己点検	
	できている	できている	できていない
予習復習が不可欠な授業を行っている	5 4 3 2 1	予習復習を必ず行っている	5 4 3 2 1
ノートは4月に決めたルール通りに書かせている	5 4 3 2 1	ノートは4月に決めたルール通りに書いている	5 4 3 2 1
締め切りを過ぎた提出物は受け取らない	5 4 3 2 1	提出物は必ず締め切りを守っている	5 4 3 2 1



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

## プラスαの指導

### 「書く」「述べる」ことで 当たり前のことを自覚させる

HRなどで、年度当初の学年やクラスの目標、担任が日頃から口を酸っぱくして伝えていることを、生徒に書かせたり、発表させたりしてみる。家庭学習や提出物に関すること、掃除に関することなど、テーマを挙げて誘導してもよい。「今更？」と感じる生徒もいるだろうが、普段から繰り返し訴えていることだからこそ、改めて生徒自身に書かせたり、述べさせたりすることで新鮮さをもって浸透していくはずだ。目標として掲示している場合は、掲示物を作り直してもよいだろう。

### クラスを団結させることで、 学校に目を向けさせる

生徒一人ひとりがいち早く夏休み気分から抜け出し、学校での時間を大切にできるようになれば、自ずと日々の生活に張りが出て、授業に集中し、部活や学習もしっかりやるようになる。そのためには、クラスで1つのことに向けて団結する雰囲気をつくっていくことが重要だ。学校行事はもちろん、学習時間調査や定期考査、模試へ向けた学習などをクラス単位で競わせたりするのも一案だ。事あるごとに、担任が「うちのクラスは」と強調し、「団結することの重要性」を訴求していきたい。

### 厳しく指導しながら、 褒めるべき点は褒める

夏休み後、生徒が再び高校生活のリズムを取り戻すまでは、緩んだ気持ちを引き締め、高校生として当たり前ができるように、あえて厳しい姿勢で指導に当たることが求められるだろう。しかしその一方で、生徒の内面に見逃せない変化が起こっていないか、生徒の表情などを細かく見ていくことが必要だ。同時に、生徒が努力して改善したこと、頑張っていることなどがあれば、積極的に褒めることを忘れないようにしたい。生徒の「褒めるべき点」を学年団で共有してもよい。

### 活用後のフォロー

◎生活・学習面で当たり前のことを当たり前できているかは、折に触れてチェックをしていくことが非常に重要。今回、指導を徹底したことができているかどうかは、冬休み前には再確認したい。いずれの時期でも、生徒にただチェックさせるだけでなく、なぜ決められたことができないのか、どうすればできるようになるのか、面談などで個別に話し合うことが必要だ。また、同様に学年団などでも「当たり前のことを守らせているか」をその都度確認する。今回のヒアリングで、ある教師が「生徒があきらめる時は、教師もあきらめている」と語っていた。まず、教師自身があきらめないようにしたい。

### データ活用 のねらい

## 4月のルールを教師も生徒も守る

**4月の約束を再確認する** ●夏休みが明け、高校生活が再開した9月、高校への慣れによって4月に決めた高校生としてのルールが守れなくなり、その影響で生活や学習面、部活動への取り組み方などに変化が見える生徒も増えてくる。「〇〇高校の生徒としてこれだけは守ろう」と4月に決めた約束や目標などを再確認し、徹底することは、1年生の後半はもちろん、2年生の過ごし方を決める上でも非常に重要だ。

**学年の団結力につなげる** ●「高校生として当たり前のこと」を徹底させるには、学年団としての目線合わせが不可欠。あるクラスでルールが守られていないことが分かれば、ほかのクラスに悪影響を及ぼすからだ。そうならないためにも、まずは1年生にかかわる教師自身が「4月のルール」を徹底できているか、検証することが大切だ。教師自身がルールをないがしろにするようでは、生徒への徹底は到底望めない。

### データ活用 の流れ

## 一人ひとりが課題を検証する

**生徒個々の問題点を把握** ●多くの高校で、9月に生活・学習実態調査が行われる。4月の調査は新入生の全体像を把握するためのものだが、9月は生徒個々の学習・生活上の問題点を見つけるためのものだ。そこで、図1のように生徒が自らを省みるような調査を行ってみる。その上で、面談で4月のルールが徹底できているか、高校生活に不安を感じていないかなどを確認し、個別にアドバイスをする。あきらめを感じている生徒には、ここでリセットすれば挽回が可能なことを、図2のような例を挙げて理解させる。

**教師も自分自身を振り返る** ●4月のルールの徹底は教師集団にも必要。図3などで生徒の様子を具体的に確認すると共に、生徒への調査と並行して、教師自身が「高校らしい授業をしているか」を点検し、生徒の認識と擦り合わせる(図4)ことも必要だろう。

### 生徒・教師共に 年度当初に掲げた 目標を再確認する

生活リズムを正すと共に、学習習慣を定着させていくために、学習記録を実施する(図1使用)

個別面談などで、生徒の悩みや不安を聞き出し、対応する

先輩の実例などを挙げながら、この時期に生活・学習習慣を立て直す意味を理解させる(図2使用)

教師自身が4月に決めたルールを徹底するように、学年会などの場で確認する(図3、4使用)

## 図5 フォローのポイントを学年団で共有するシート

ダウンロード

- 教科の好き嫌いとう文理選択を直結させない
- 進路を自分で調べていくことの重要性を伝える
- 面談を通して自分の特性や長所を生徒に気付かせる
- 苦手科目などの課題を克服することで進路選択の幅が広がることを伝える
- 学部や職種などに関して生徒の視野を広げる
- どんな進路を目指すとしても、基礎学力や礼節が大切であることを強調する

## 図6 上級生が振り返る文理選択

ダウンロード

文理選択で重視したこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・将来はインターネットの技術について研究したいと思っていました。文系でも研究できるけど、理系の方が進学先の選択肢が多かったので理系にしました。(3年生Aさん)</li> <li>・もともと小説が好きで、勉強するなら日本文学と思っていました。将来の職業はまだ分かりませんが、大学の勉強は好きなことをやりたいと思いました。(2年生Bさん)</li> </ul>
選択に当たって成績は気にしたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数学が本当に苦手で、物理にも自信がなかったので、先生と相談して文系にしました。行きたい学部も文系だったので不安はありません。(3年生Cさん)</li> <li>・数学が苦手だったのですが、数学の予習復習に今までの倍の時間をかけてみたところ、少しずつ授業が分かるようになったので理系を選びました。(2年生Dさん)</li> </ul>
文理選択で後悔していることは何か	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文系理系それぞれから進める学部・学科をもっと調べておけばよかった。(3年生Eさん)</li> <li>・理系に進むと高2、高3でどんな授業を履修するのか、勉強はどれくらい大変で予習復習はどれくらいやるのかを先輩に聞いてみればよかった。(2年生Fさん)</li> </ul>

在校生だけでなく、卒業生に高校卒業後の進路と文理選択の関係を語ってもらえばより効果的だ

## 図7 文理選択 自己決定チェックシート

ダウンロード

<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分の内面を振り返る</li> <li>将来なりたい職業は</li> <li>気になる学問は</li> <li>気になる大学・学部は</li> <li>得意科目が多いのは</li> <li>授業を受けていて楽しいのは</li> <li>何となく自分に合いそうなのは</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 周囲の意見を振り返る</li> <li>保護者が勧めるのは</li> <li>学校の先生が勧めるのは</li> <li>友達が勧めるのは</li> <li>部活動などの先輩が勧めるのは</li> <li>社会のニーズから考えると</li> <li>職場体験などで聞いた話から考えると</li> </ul>
きみが選んだのは <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 50%; padding: 5px; text-align: center;">文系</div> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 50%; padding: 5px; text-align: center;">理系</div> </div>	上のさまざまな要因の中で、きみは何を重視した？

学年主任、担任、保護者の確認欄を設ければ、生徒はより本気で取り組むようになる

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！右のウェブサイトをご覧ください！ただけです。

- 2007年9月号
- 「1年生夏休み明けの意識付け」
- 2008年10月号
- 「1年生2学期の成績層別面談指導」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>
  

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→  
 生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料が  
 ダウンロードできます！

生徒指導・  
 進路指導ツール集

ウェブサイトから  
 ダウンロード！

## プラスαの指導

### 11月模試で自分を試し、 文理選択に生かす

「理系に行きたいが数学が苦手なので自信がない」という生徒は必ずいるものである。このような生徒から相談を受けた場合、教師としてもどうすべきか、簡単には答えは出ない。そこで11月の模試を利用する。「模試までの2か月、一生懸命勉強してみて、これからも数学を頑張れそうか、自分を試してみないか」と話してみる。良い成績が出れば自信になるし、結果が出なくても勉強のリズムができれば理系に進む気持ちが高まる。たとえ文系を選んでも、生徒自身が納得できるはずだ。

### 教科ごとの 学習時間を提示する

生徒が文理選択で迷う理由の1つに、文系・理系それぞれの高校生活がイメージできないということがある。そこで文系理系それぞれの2、3年生の時間割や家庭学習時間の例を生徒に提示する。今後、どの教科にどのくらい時間をかけて勉強する必要があるのかがイメージできるはずだ。これからの2年間の高校生活を想像してみることで、自分に文理どちらが合っているかを判断する材料の1つになるだろう。同時に、部活動の先輩などに直接話を聞いてみることも勧めたい。

### 「自己決定」の重要性を 人生の先輩として教師が語る

人生は自己決定の連続であり、文理選択はその第一歩であることを生徒にしっかりと理解させたい。その上で、自分の決定に対して責任を持つことは大切だが、今の志望や目標に固執しすぎることも可能性を狭めてしまうこと、将来について柔軟に考えることが大切であることを伝えたい。教師自身が、自分の進路選択の紆余曲折、価値観の変化などを語る事が重要。モデルケース的な生き方が求められるわけではなく、そもそも人は迷い、悩みながら生きていくことも伝えていきたい。

### 活用後のフォロー

◎進路希望調査や文理選択のために、生徒は大学や学部・学科、職業などについていろいろと調べるだろう。だが、そういった進路学習の成果は、文理選択だけのためにあるわけではない。今後の科目選択や大学選択など、高校生活での進路選択の基礎となるものなのだ。生徒自身が、進路選択の流れと、自己実現のプロセスを連続性をもってとらえ、その上で文理選択に臨むことが重要だ。文理選択の前後で、進路学習のスケジュールを生徒に周知すること、また文理選択後に文系理系それぞれの授業への期待感を高めることなどが求められる。2年生の進路学習や学習の様子などを折に触れて紹介したい。

データ活用  
のねらい

## 本格的に進路を考える第一歩にする

**自己決定を意識付ける** ●文理を決める際、「先生に勧められたから」「保護者に言われたから」「友だちと同じがいいから」「数学が苦手だから」など、決して前向きとはいえない理由で選択をしようとする生徒もいる。しかし、どのように決めたとしても、「自己決定」であることはしっかりと伝えておきたい。「人生は自己決定の連続で、文理選択もその1つであり、すべての責任は自分に返ってくる」ということを伝え、真剣に文理選択に臨ませたい。

**文理選択の考え方を示す** ●文理選択は、高校生として初めての進路選択だ。だが、この二者択一の選択は容易ではない。教科の好き嫌いなどで安易に選択することがないように、文理選択のポイントを紹介し、選択を終えた先輩の振り返りなどを資料として与えるなど、選択のための指針の提供が求められる。

データ活用  
の流れ

## 選択過程の振り返りまで必要

**ポイントを教師・生徒が確認** ●指導に先立って、選択のポイントは何かなどを教師間で共有することが必要だ。特に「二者択一の選択でも迷い、適切な選択ができない生徒が存在する」ことを教師団が共有して、指導に臨むことが重要。図5などで取り組みへの認識ギャップを埋めていく。これは同時に、文理選択のポイントとして生徒に伝えるべきエッセンスでもある。図6の先輩の振り返りと併せて伝えることで、より緊張感をもって臨めるだろう。

**自己決定の過程を振り返る** ●職業や学問、大学など、さまざまな観点から生徒は文理選択を考えるが、最終的には「自己決定」の結果として選択のプロセスを振り返ることが欠かせない。選択のポイントはさまざまだが、そのうちのどれを、どの程度重視するかは人それぞれである。周囲の意見も判断材料の1つとして受け止め、主体的な選択をさせたい(図7)。

### 文理選択は 「自己決定」を 強調する

文理選択の指導をする前提として、時期ごとの指導のポイントを学年団で共有(図5使用)

文理選択に関する先輩の振り返りを、学年集会や個別面談時に生徒に提示(図6使用)

学年集会やHRなどで、文理選択の考え方、進め方を伝えると共に、「自己決定」の1つであることを訴求

文理選択の最終決定前に、どのようなプロセスを経て、決定したかを生徒に振り返りをさせる(図7使用)

# 未来をつくる大学の研究室

最先端の研究を大学の先生が誌上講義！

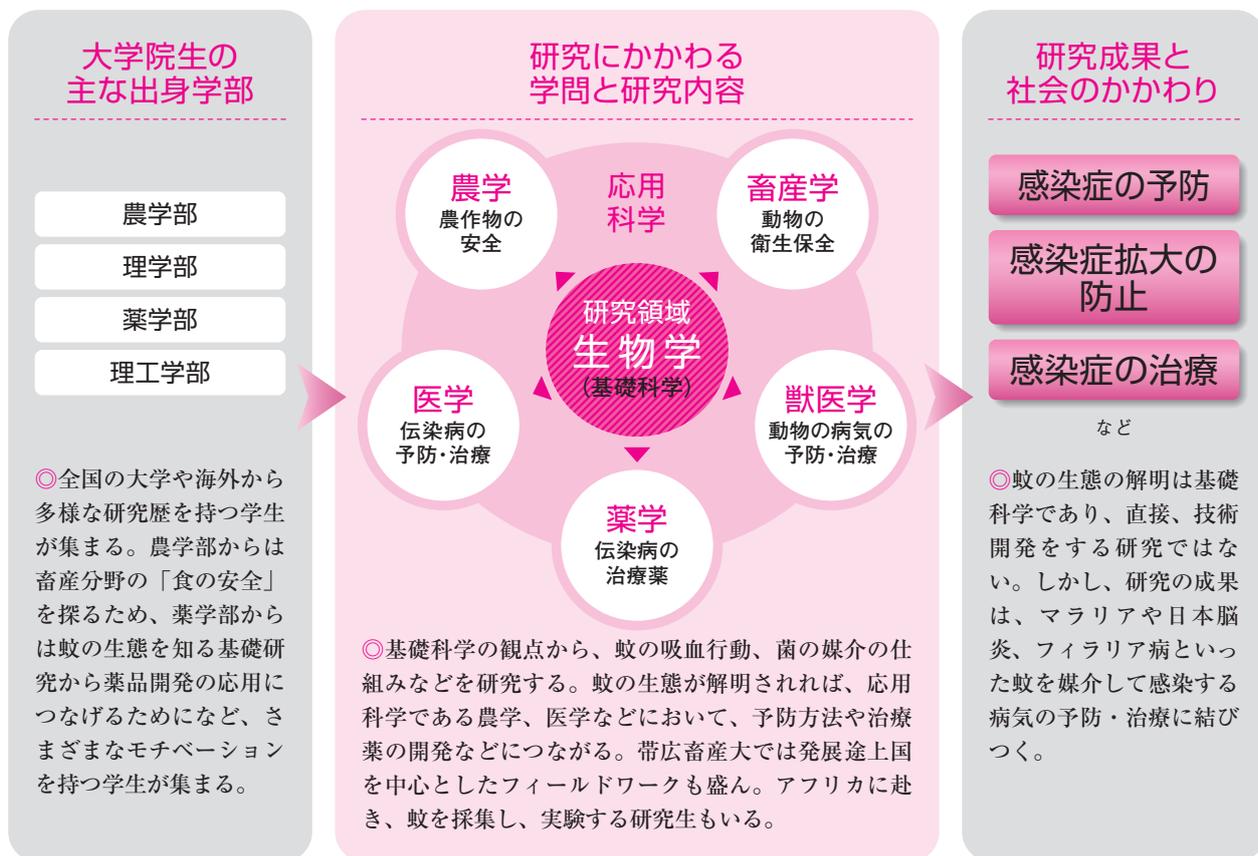
## 21

### 蚊の生態や感染のしくみを解明し 感染症の予防・治療につなげる

帯広畜産大 原虫病研究センター 原虫進化生物学研究分野 かぬかひろたか 嘉糠洋陸研究室

蚊やハエなどの吸血節足動物は、動物の持つ病原体を人間に感染させてしまうという恐ろしい一面を持つ。ところが、蚊の生態や吸血の仕組みには不明な点が多く、病気の感染源と分かっているにもかかわらず、予防法が確立していないのが現状だ。帯広畜産大の嘉糠洋陸教授（グローバルCOEプログラム「アニマル・グローバル・ヘルス」の拠点リーダー）は、吸血節足動物の生態解明こそが感染症の予防や治療法構築に真に貢献できるものと考え、基礎研究の立場から「蚊」の研究に取り組んでいる。

#### フローチャートで分かる嘉糠研究室





嘉糠洋陸 教授 Kanuka Hirotsuka

帯広畜産大原虫病研究センター教授。医学博士。専門は、病原体媒介節足動物の生物学・分子遺伝学。東京大農学部獣医学科卒業。大阪大大学院医学研究科博士課程修了後、理化学研究所基礎科学特別研究員、アメリカ・スタンフォード大学日本学術振興会海外特別研究員、東京大大学院講師を経て、現職。文部科学省のグローバルCOEプログラムに選定された、「アニマル・グローバルヘルス」の拠点リーダーも務める。

### 研究の内容

## 身近であっても科学的に証明されていない蚊の生態

皆さんは蚊に刺されたことがあると思います。蚊に血を吸われると皮膚がかゆくなりますが、実は、単に不快な思いをさせられるだけでなく、蚊は病原体を媒介する危険な生き物でもあるのです。

蚊は、人間だけでなく動物の血も吸います。病原体を持つ動物の血を吸うと、その病原体も体内に取り込んでしまい、その蚊が人間の血を吸う時に、体液と一緒にその病原体を送り込んでしまうのです。蚊が媒介する病気には、マラリアや日本脳炎、フィリリア病などがあります。衛生環境が整っている今の日本では感染者はあまり出ませんが、いずれも死

に至ることもある恐ろしい病気です。では、蚊はどのようにして動物を見つけて、どのようにして血を吸うのでしょうか。それが分かれば、感染の予防や病気の根絶につながる可能性があります。これだけ身近な生物なのだから、多くの研究報告が出されていると思うかもしれませんが。しかし、蚊の生態は全くといっていいほど分かっていないのです。

例えば、「蚊は動物や人間が発する体温や二酸化炭素を感じて寄っていく」といわれていますが、それは科学的に証明されているわけではありません。ドライアイスで実験をしてみると、確かに、蚊は発生した二酸化炭素に近寄っていきます。しかし、だからといって、人間が発する二酸化炭素にも寄るとい論理は成立しません。人間が二酸化炭素を

### 研究の目的

## 基礎研究による蚊の生態の解明が予防につながる

排出しない状態にして実験したときに蚊が近寄らないことが証明されて初めて、「人間が排出する二酸化炭素に蚊が寄る」と立証できるのです。「汗をかくと寄ってくる」「O型は吸われやすい」などの俗説は数あれど、何一つ証明されていない蚊の生態はいかなるものか。私の研究室では、それを解明しようとしています。

私が蚊を研究テーマに選んだのは、研究者が少なかったために明らかに大きく、かつ自分が興味を持ったからです。

実は、大学では獣医学科に、大学院では医学系の研究室に所属し、蚊とは異なる分野の研究をしていました。一人前の研究者になるまではすべてが勉強だと思い、さまざまな分野の研究者の下で研究手法や物事の考え方を吸収してきました。

研究者としての素地を培う中で、最も影響を受けたのは「基礎研究を大切にする」という姿勢です。

私の研究テーマは「蚊の生態の

解明」であって、「感染症の予防」ではありません。例えば、蚊が人間に寄らない方法を考えようとしても、「寄る仕組み」が分からないのに寄らないようにすることはできません。更に、予防という目的ばかりを考えると、予防に必要なことは切り捨ててしまいがちです。蚊の真の姿を見ずに、真の予防法など見つかるはずがありません。基礎研究をしっかりとし、蚊の生態を解明することこそが、予防にも治療にもつながると考えています。



写真1 専用の装置で環境を管理しながら、実験に使う蚊を飼育している

かつてきています。それは、「蚊はどこで熱を感知するのか」ということです。触覚や足など、それぞれ体の一部を切除した蚊を熱源のある装置に入れ、熱源に接触した回数を赤外線センサーで数えるという実験をしました。すると、「口」を切除した蚊は、熱源に全く近寄らなかつたのです。動物を使って同様の実験をしたところ、同じように、口を切除した蚊だけが動物に寄っていきませんでした。この実験で、蚊は口で熱を感知してターゲットに近づくことが分かりました。

では、蚊はどのようにして動物の種類を見分けているのでしょうか。次の研究テーマの一つです。蚊は約2500種いるといわれていますが、そのすべてが人間の血を吸うわけではなくありません。ウシだけ、ウサギだけ、イヌだけと種類によって好みがあります。動物の体温は38〜39度と人間よりやや高めですが、蚊が1、2度の差を感知しているように思えません。ターゲットを見分ける熱以外の「何か」があると考えています。更に興味深いことに、蚊は環境に応じて好みを変えられます。ウサギ

の血しか吸わない蚊をネズミしかない環境に置くと、その5世代後の蚊は、ウサギの血しか吸わなかつた蚊の子孫にもかかわらず、ネズミの血しか吸わなくなるのです。「獲得形質の遺伝」といわれる現象で、今後、解明していきたいテーマです。

### 高校生に伝えたいこと

## 「負荷なくして成長なし」大切なのは自律

大学を選ぶ観点として「何を研究できるか」も大切ですが、「何を身に付けられるか」も知った上で選んでみてはどうでしょうか。例えば、

帯広畜産大の場合、教育の特色として「機動力」が挙げられます。北海道帯広市という地方にありながら、東南アジアやアフリカなど、50か国以上の大学や研究機関と連携関係を結んでいます。研究において重要なフィールドワークをしやすい環境が整っているわけです。私の研究室の大学院生は、研究テーマを決めてからわずか1か月後に、アフリカに蚊を採集しに出掛けました。大学院生のうちから、海外で研究を進める上でのノウハウが身に付けられる。こ



写真2 写真は、遺伝子組み換えをして、目を緑色に光らせた蚊。遺伝子組み換えや解剖をして、さまざまな条件下の蚊を使って実験を行う

れは他大学ではあまりないことです。つまり、この大学に入って、自分はどうのような人間になりたいのか、そのイメージを明確にして、大学を選んでほしいと思います。

もう一つ伝えたいことは、「負荷なくして成長なし」という言葉です。部活動でもそうだと思いますが、つらい練習を乗り越えなければ試合には勝てません。それは、勉強でも趣味でも同じです。例えば、勉強時間をいつもの2倍に増やす、北から南まで全大学の化学の入試問題を解く。いつも以上の目標を立て、やり遂げてみてください。成長するために、自分に負荷をかけ、挑戦していく姿勢を身に付けてほしいと思います。

### 用語解説

① マラリア、日本脳炎、フィラリア病  
いずれも蚊を媒介にした感染症。マラリアは、感染すると40度前後の高熱や頭痛などの症状を起こし、死に至ることもある病気。日本脳炎はウイルスによる脳炎のこと。フィラリアは寄生虫の名前で、日本では蚊が媒介する。イヌのフィラリア病がよく知られる。

② 感染症  
寄生虫や細菌、ウイルスなどの病原体が体に入り込むことによって生じる病気のこと。感染の方法は、唾液や血液など体液の付着、蚊のような吸血節足動物による媒介など、さまざまである。

③ 獲得形質の遺伝  
親が生まれつき持っていた体の性質ではなく、成長過程で獲得した性質が、子に遺伝するということ。遺伝子レベルではあり得ないこととされている。例えば、事故で足を失った人の子どもが生まれつき足がないということは、遺伝上あり得ないからだ。

④ セラチア菌  
水や土の中、動物や人間の腸など、さまざまな場所に存在する。数種類の菌の総称。病原性は弱い。抵抗力の落ちた病人や手術直後の人が感染すると、敗血症や呼吸器感染症などを引き起こすことがある。

# 身近にいる微生物から感染予防への道を探る



**伴戸寛徳**さん  
Bando Hironori

帯広畜産大原虫病研究センター  
原虫進化生物学研究分野博士課程1年  
(北海道札幌手稲高校卒業)

**Q** **なぜこの分野に進んだのですか**

**A** 大学時代には、微生物農薬の研究をしていました。農薬と

いえば殺虫剤が主流ですが、それは自然や人体への悪影響が問題になっています。そこで、注目されているのが微生物農薬です。例えば、作物を食べる虫に寄生する菌をまいて殺虫するという方法です。もともと自然界に存在する微生物を使うので、環境への負荷も減らせるからです。微生物は生物の中で最も繁栄して

いて、高温のマグマの中にも、何千メートルの深海にも、生息しています。中・高時代は、そうした特殊な環境にいる微生物に興味がありました。しかし、大

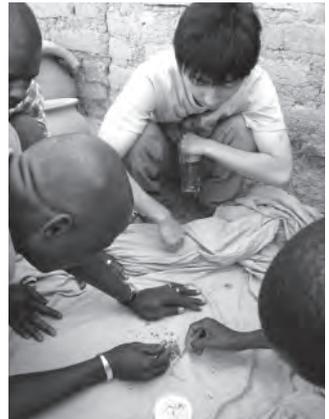
学で学ぶうちに、人間の体の中には、まだまだ分からない微生物がたくさんいることを知りました。そして、身近でありながら無限の可能性を秘めている微生物に魅力を感じ、研究テーマに選んだのです。

嘉糠先生の研究室は蚊をターゲットとしていますが、私は微生物の観点から蚊にアプローチしています。

**Q** **現在の研究内容を教えてください**

**A** 人間の腸に大腸菌がいるように、蚊の腸の中にも菌がいます。蚊は吸った血を腸にためるので、腸にいる菌と後から入り込む病原体がどのような関係にあるのか、病原体の媒介を腸内環境で抑えることはできないかという視点から、研究を続けています。

修士課程2年生の時には、マラリ



**写真3** ブルキナファソでの蚊の採集の様子。部屋の床全面にシートを敷き、殺虫剤をまいてドアを閉め、しばらくしたらドアを開けてシートに落ちた蚊を1匹ずつ集める。2、3畳の広さの部屋で、血を吸った蚊が100匹以上採集できる

アが頻繁に流行する地域に生息する蚊の腸を調べるため、西アフリカのブルキナファソで調査・研究を行いました。1か月かけて、数百匹の蚊を採集し、一つひとつの腸を取り出して調べたのです。すると、蚊の腸にはセラチア菌があると分かりました。帰国後、セラチア菌がマラリア原虫にどのような影響を及ぼすのかを調べるため、抗生物質を投与して腸を無菌状態にした蚊

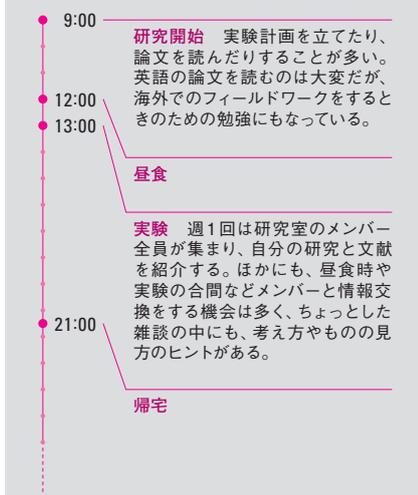
と、セラチア菌だけを持つ蚊に、それぞれ同数のマラリア原虫を入れしました。すると、無菌の蚊の腸内ではマラリア原虫が300個に増殖したのに対し、セラチア菌を持つ蚊は60個と増殖数が少なかったのです。今は、セ

ラチア菌をマラリアの感染予防に利用できるよう、マラリア原虫がどのように抑制されているのか、メカニズムを探っています。

**Q** **高校生へのメッセージをお願いします**

**A** 高校時代は弓道部に所属し、高校総体に出場できるほど打ち込みました。この時に、何事にもあきらめずに取り組むという、精神面の基礎が出来たと思います。部活動でも勉強でも趣味でも、一つのこと全力を傾けてみてください。一つのこと一生涯懸命になれる人は、受験勉強でも大学の研究でも、興味を持ったことには全力で取り組めるようになると思うからです。

## 大学院での伴戸さんの1日



学校を活性化させる"30代"は、何に悩み、何を課題と感じているのか

# 「大学に入ったが したいことが分からぬ そんな生徒をなくしたい」

島根県・私立石見智翠館高校教諭 細木康弘 Hosogi Yasuhiro

「実績を出さなければならぬというプレッシャーから、生徒の気持ちを考えずに指導していた」と振り返る細木康弘先生。今は、生徒が自ら将来を考え、伝えられるようになることを目標とし、そのために自分自身の視野を広げていくことが課題と話す。

## かつての私

「『質』より『量』——実績を出したい」と生徒無視の指導に走る

担任をする智翠館特別コースは、1学年1クラス、十数人のみです。3年間持ち上がりなので、生徒と話す時間はたっぷりあります。入学するとまず好きなことを50個書かせます。これを話題のきっかけとして、将来を考えさせるように働き掛けていきます。

ただ、いくら話し掛けても、なかなか自分の考えを話せない生徒もいます。そういう生徒には、頻繁に声を掛け、時機が来るまで待ちます。「自分はこれをした」と自ら発見

した時に、生徒はとても強くなり、それが自立のきっかけになるからです。

今でこそ生徒のことを考えた指導が少しできようになりましたが、以前は全く違う気持ちで生徒と接していました。

本コースの前身である「智翠館コース」は超難関大進学を目指し、2001年度につくられました。私は02年度に1期生の2年生から担任を受け持ちましたが、まとまった進路指導経験がない中で、「とにかく実績を出さなければ」と必死でした。それまでは進学コースで国語を担当し、野球部のコーチでした。野球部は夏の甲子園大会に7回出場したほどの強豪で、部活動中心の生活となっていました。



ほそぎ やすひろ  
教職歴14年。公立高校に1年間勤務後、同校に赴任。2002年度から「智翠館コース（現・智翠館特別コース）」を担当。教科は国語。現在は智翠館特別コースの2年生担任、進路指導主任。

◎1907（明治40）年設立。全日制の普通科高校。難関大進学を目指す「智翠館コース」を01年度に設け、東京大、京都大など合格実績を着実に上げる。野球部・ラグビー部は全国大会出場常連。  
◎教員数：34人（うち智翠館特別コース6人） ◎1学年生徒数：約100人（うち智翠館特別コース約15人） ◎2009年度入試の合格実績：国公立大は東京大、広島大、鳥取大など10人合格、私立大は、明治大、早稲田大、立命館大、関西大などに延べ71人合格。

た。この時の指導経験は、智翠館コースでの指導にも大いに役立ちました。ただ、本校自体に難関大への進学実績が少なく、学年団がない環境で一緒に考える仲間もいません。熱意はあっても、進路指導のノウハウが得られない。自分1人であがく日々が続きました。

「指導法に自信がないなら、とにかく『量』で対抗するしかない」と、私はスパルタ指導に走りまわりました。「難関大の合格方法」が書かれた書籍を読みあさり、自分の受験時代を思い出しながら指導計画を立てました。他校の先生から「年末年始の休みは大みそかと元旦だけ」と聞けば、私も休みなく生徒を学校に來させて補習をしました。模試は全教科を徹底的に分析し、他校に比べて得点が低かった分野を見つけて、担当教科の先生に話して、その分野の指導を強化してもらいました。志望校を決めるにしても、少しでも難易度

の高い、名の通った大学に入ることが、生徒にとって幸せだと思っていました。「この大学に入れる学力があるのに、なぜ受けないのか」と、生徒の志望も考えずに模試の結果だけで志望校を勧めていました。今、振り返ると、生徒に申し訳ないと思うばかりです。

#### 現在の私

### 「何をすればよいのか分からない」 卒業生の言葉で指導を見直す

結果として、1期生から数人が難関国公立大に合格しました。この経験から5期生の担任になった時、最初はスパルタ指導を貫きました。しかし、だんだんと違和感を持つようになったのです。きっかけは、志望校に入った卒業生がぼろっとこぼした言葉でした。

「大学に入ったけれど、何をすればよいのか分からない」

頑張って難関大に入ったのに何を言っているんだ、と最初は思いました。しかし、その卒業生は明らかに大学生活が楽しそうではありませんでした。一方、1期生の中に、志望校に合格できずに地元の看護学校に進学しながら、その後、4年制大に編入した生徒がいました。その卒業生は、就職報告時に「高校時代にじっくり将来を考えられてよかった、したい仕事が見つかりました」と、生き生きとした顔で語っていました。

難関大に入っても、したいことが見つからないのでは意味がない。高校時代に見つからなかったとしても、将来への種をまくことが大切なんだ――。私は気付かされたのです。

今、私は生徒に「将来は何をしたいのか」と語りかけるようにしています。どのような仕事をしたいのか、仕事を通してどう社会に貢献していくのか。挑戦したいことや興味・関心を徹底的に掘り下げ、その分野につながる学部・学科を探させます。そして、全国からその分野に秀でた大学を見つけさせます。大学名や単に資格が取れるからといった安易な決定は認めず、何度も考えさせ、生徒自身が自分の夢を語れるようになるまで待ちます。前年度に担当したある生徒は、3年生の11月にやっと、本当にしたいことを口にしました。何度も話し掛けていましたが、なかなか教師の私には言い出せなかったのです。その後は、晴れ晴れとした表情になり、停滞していた成績も伸び、最終的に志望校に合格しました。私は、教師としての自分を信頼してもらう重要性を痛感しました。早い段階で信頼関係を築くにはどうすればいいのか、試行錯誤を続けています。生徒との関係づくりはもちろん、定期的な保護者会その他にランチミーティングなども設けて、保護者にも自分の思いを伝えていきます。もう二度と「何をすればよいのか分からない」と言う生徒を出さない

ために、安心して自分の進路を考え、語ることでできる環境づくりに今、挑んでいます。

#### これからの私

### 視野を広げることで 生徒の進路実現の助けになりたい

本校は、松江市や益田市から離れた江津市にあります。進路決定に際しては保護者や知り合いの影響が強く、視野が狭くなりがちです。そうした生徒に社会へと目を開かせ、社会とどのようにかわっていきたいのか、自分の好きなことや、やりたいことを基に将来をしっかりと考えさせ、自ら語れるほど明確にした上で、志望校を探し出せるようにする。これが、今の私にとっての大きな課題です。

生徒の視野を広げるためには、自分自身の視野を広げていくことも重要だと思います。学外の研修会などに声を掛けてもらい、他校の先生と話す機会が増えてきました。これまで自分自身で勉強してきたことは、他校の先生と対話する素地になっています。更に、他校とのつながりができたおかげで、合同の講演会や学習会を設けられるようになりました。他校生との触れ合いは、閉鎖的になりがちな環境にいる本校の生徒にとって大いに刺激となっています。生徒の意識を高めていくためにも、私自身がどんどん外に出て、多くの人と出会い、経験を積んでいきたいと思っています。

# 地方公立高校の挑戦

学校と地域が一体となった  
「陸の孤島」の学園構想

地方公立高校の使命——それは単なる教育機関ではなく、その地域の「人が集う場所」として中心的な役割を果たすことでもある。地域に育てられ、地域を育てる小さな分校の大きな挑戦を紹介する。

## 広島県立 加計高校 芸北分校



### 地域と協力し、 小中高大の教育資源を 最大限に生かす

地域からの信頼がなければ  
学校は存続できない

広島県立加計高校芸北分校のある芸北地域（旧・芸北町）で、「芸

北学園構想」が提唱されたのは1990年代半ばのこと。地域の子どもを、地域の後継者として、地域で育て上げるために、保育園から幼稚園、小学校、中学校、そし

て芸北分校が地域住民と連携して次世代育成に当たろうというものだ。この構想において、学校教育の「出口」である芸北分校の存続・発展は、地域の過疎化に歯止めをかける意味でも特に重要であった。公共交通機関が発達していない芸北地域では、子どもを他地域の高校に進学させるには大きな経済的負担が強いられる。そのため、芸北分校が地域の中学生や保護者に対して求心力を失えば、中学生のいる家庭が芸北の外に居を移さざるを得なくなる、という事態も想定された。

そこで芸北分校は、01年度から「連携型中高一貫校」として隣接する北広島町立芸北中学校と教員の

授業の相互乗り入れ、合同行事・会議、連携型入試などを行ってきた。また、地域の5小学校、1中学校と校長会議を毎月1回行うなど、綿密な連携を進めてきた。

だが、簡便な方法の入試しか行わない一貫教育では、生徒の学習意欲をいかに維持・向上させるかは共通の課題だ。芸北分校もこの問題に直面した。04年度、05年度と、2年連続して国公立大合格者がゼロになってしまったのだ。

こうした進学実績の低迷もあってか、05年度は29人だった芸北分校の入学者は、06年度は16人に減少した。このうち、13人は連携校である芸北中学校からの進学者であったが、それは芸北中学校の卒

Challenge

業生のおよそ半数に過ぎず、過去5年間で最低の数字だった。つまり、ほかの十数人は、芸北分校を選ばなかったのだ。

「いつしか地域では『芸北分校では学力は上がらない』『芸北分校に行くとは難関大に合格できない』といった風評が広まっています。例えば校外模試も高3になってようやく、希望する生徒だけが受験

する状態。こういった状況では、生徒は、本当はA大志望だったのに、合格可能性の高いB大に変え、更に入りやすい専門学校にと、進学目標を下げていきます。しかし、それでは希望進路の実現とはいえません。本当の意味で生徒の希望進路を実現させなければ、この分校は地域から見捨てられる。私たちは、強い危機感を抱きました」(進

図1 第2学年1学期中間テスト(抜粋)

	使用教材	範囲	到達目標・ワンポイントアドバイス
古典講読	「史記・十八史略抄」	P53の3行目～P57	黒板に赤と黄色で書いたことから中心に学習し、ノートをよく見て本文の内容を理解しておくこと。
	漢文必携	句形2・4・5・6・7・8 ・10・11・15 (P30～P35)	それぞれの例文について、A「ひらがなだけで書き下し文に直しなさい」B「口語訳をしなさい」という形式で問う。
日本史B	教科書	P4～P33	教科書の本文はもちろん、語句説明や解説図の内容もきちんと理解しておきましょう。
	補足プリント	「文化のはじまり」 「小国の分立」 「律令国家の形成」	穴埋め部分だけでなく、解説を加えたものや、資料の説明などの内容もきちんと理解しておきましょう。
数学II	教科書	P6～P27	例題を解答を見ながらでもまず解いてみる。問は例題に類似した問題なので、例題を参考にしながら解いてみよう。最低限、教科書の範囲の問題は完全に解くことができるようになってほしい。
生物I	教科書	P10～P15 P24～P33	次の事項について理解し、説明できるようになる ①細胞説②細胞の構造と機能③体細胞分裂④生物のからだのつくり 教科書だけでなく、該当する授業プリントにも目を通しておう!
英語II	教科書	Lesson 1 (Part 1～3)	・新出単語、熟語を書くことができる。 ・本文を理解した上で、何回も音読する。 ⇒本文の穴埋め問題ができます。 ・Grammarを理解し、教科書の例文は「日本語→英語」ができるようにする。
	サブテキスト	(基礎・標準クラス)P8～P39 (発展クラス)P8～P59	・芸北分校の英語学習のサイクルを意識しながら、まずは理解をして、その上で、要点を暗記し、応用ができるように練習しましょう。

定期テストの2週間前に全科目の試験範囲と学習ポイントを配布。試験1週間前まで行われる部活動との両立に、より意識的に取り組ませることが目的だ。また同校では、テスト3日前から80分間の自学自習の学習会をHRで開催。定期テストに向けての生徒、教師の緊張感を学校全体で高めている

路指導主事・加藤賢一先生

**文武一如の生徒にすべきこと、  
してはならないこと**

真の希望進路が実現できる分校に……。06年度から同校では学習と進路を柱とした新しい取り組みに着手していった。

「前年度に29人も送り出してくれた地域の期待にまず応えようと、高2生に対して、秋以降を『高校3年生・0学期』と位置付けて進路ガイダンスを開催しました。大

学入試の現状とそれに向けての心構えを説きました。また、放課後

07年度には夏期講習で広島大学の学部生、院生を招き、補習授業、学習相談を実施。更に、08年度からは進研模試の成績アップ者に対して、表彰状と「芸分魂えんぴつ」の贈呈を開始した。

や土曜日に図書室を自習室として開放し、受験生としての意識付けを行いました。全学年に対しては、定期テストの2週間前に、全科目の範囲、出題ポイント、学習のアドバイスをまとめ、配布しました(図1)。部活動が盛んな本校だからこそ、部活動と勉強の両立を生徒に求めたのです」(加藤先生)

School Data

広島県立加計高校芸北分校

- 設立 1948年(昭和23年)
- 形態 全日制/普通科
- 生徒数 1年生28人、2年生33人、3年生25人
- 09年度入試実績 16人の卒業生のうち進学希望者6人が全員現役合格。国公立大志望者3人は県立広島大、島根県立大、高知工科大に合格。私立大は広島工業大、龍谷大、専修大に合格。
- 住所 〒731-2323 広島県山県郡北広島町川小田75
- 電話 0826-35-0726
- Web Site <http://www.kakegeihoku-h.hiroshima-c.ed.jp/>



- ◎前列左から…菅川知由 北広島町立芸北小学校校長  
沼田令子 北広島町立芸北中学校研究主任
- ◎後列左から…加藤賢一 加計高校芸北分校進路指導主事  
小田均 加計高校芸北分校分校長  
難波正志 加計高校芸北分校進路担当

「芸分魂えんぴつは、芸北分校短歌賞などの課外活動の優秀者に贈っていたものです。部活動と勉強の垣根を取り払い、模試を生徒の生活の中にしっかりと位置付けようとしたわけです」（進路担当・難波正志先生）

在校生の進路・学習意識の向上のための施策を迅速に打ち出していった同校だが、教師の脳裏には「生徒に無理をさせてはならない」という思いがいつもあったという。

「本校は、勉強だけすればよい学校ではありません。部活動はもちろん、農業教育の一つであるリンゴの袋かけ、スキー実習、伝統芸能である芸北神楽と、生徒はいろいろなことに取り組んでいます。勉強以外の保護者のニーズにも応えられるよう、生徒の活動時間を確保しなければなりません」（分校長・小田均先生）

「芸北分校では勉強と課外活動は不可分のもので、生活の中に常に一体となって存在するものです。本校では文武両道ではなく、文武一如なんです」（難波先生）

「勉強以外」の時間が大切にされ

る芸北分校らしさを守りながら、真の希望進路を実現するため、同校の教師たちは改革の視点を大きく外へと向けていった。

### 中学生が高校で自習し、部活動に参加

07年度、芸北分校は連携校の芸北中学校の3年生・31人に対し、「高校0学期」の取り組みを始めた。これは、芸北分校の自習室で週3回80分間、全員参加の自学自習を行い、2週間に1回、英語と数学のアーチーブメントテストを実施。

加えて、希望者には週2回高校の部活動への参加を認めるというものだ。中学生の日常に高校生活を存在させることで、学習や進路の意識を高めようという狙いだ。

多忙な高校生に対してこれ以上何かを仕掛けるのは難しい。ならば、芸北学園構想の精神を生かして中学生に働き掛けようというわけだ。だが、日常的に中学生が高校を訪れるとなると、「活動中の監督はどちらが行うのか」「芸北分校に進学しない生徒も参加させるのか」「保護者へは誰が、どのように

図2 「高校0学期」を体験した  
中学3年生のコメント(抜粋)

#### 80分間の自学自習について

僕は最初は高校0学期が嫌でした。80分間静かにしなくてはならないし、勉強が嫌いだからです。クラスメートも「めんどくせー」と言っていました。でもやってみるととても良かったと思います。集中力がついたし、一人で自習する力がついたと思います。自分で80分の間に何をするか決めて取り組むのはとても良いことです。先生に出された宿題だけをやっているのは力をつきません。自分で決めた勉強をすると一番力がつくと思います。

#### 高校の部活動参加について

テニス部の先輩方は結構厳しく、上下関係がしっかりしていました。でも分からないことを聞くと、優しく、詳しく教えてくれました。先輩方のプレーもすごく、また何事もきばぎと行動して、ボール拾いも協力してやっていました。

説明するのか」など、課題が続出。中高合同の職員会議では、議論が紛糾したという。

「正直に言えば最初はけんかしてやるようだった」と加藤先生は振り返る。それほど反発し合っていた両者が次第に歩み寄っていったのは、電話やメールではなく、直接顔を見ながらお互いの不安、不満を出し合う中で、「限られた地域の教育資源を最大限に生かすべき」という思いは一致していることが分かったからだ。

最初、中学生からも「なぜわざわざ芸北分校に出かけるのか」といった声が上がった。しかし、実際に取り組みが始まると、生徒たちの様子も変わっていった(図2)。

集中できるようになりました。中学校の授業態度も落ち着きが増して、朝の10分間読書で時計ばかり気にしていたような生徒が、読書に没頭するようになりました(芸北中学校研究主任・沼田令子先生)

「自学自習も部活動も、芸北分校以外の高校に進学する生徒も受け入れました。分校に来るかどうかは関係なく、同じ地域の子どもとして力をつけようと考えたのです。分校進学を前提に考えていたら、この取り組みはつぶれていたかもしれせん」(小田分校長)

この「高校0学期」の取り組みを経て芸北分校に進学した生徒の成績は、入学後大きく伸びていることが「スタディーサポート」の分析結果で明らかになっている。「やればできる」ということを、生徒

図3 出身小学校へのインターンシップ活動の流れ(08年度)

●事前指導

5限 趣旨説明  
インターンシップが成功するように“働くこと”に関する話を含め、進路指導部より趣旨説明。

9月5日(金)  
6限 アイスブレイキング学習  
小学生と心の距離を近づけるため、コミュニケーションの1技法である“アイスブレイキング”を県立広島大の教授を講師に学ぶ。

9月12日(金)  
5限 総学発表会について(進路)  
インターンシップ先の小学校別のグループで、就業体験後の発表会で何をどのように発表するのかを話し合い、インターンシップでの目標を明確にする。

6限 決意文の作成  
インターンシップ実施に際して、生徒に決意文を書かせることによって、取り組みに向けた意識の向上を図る。

9月19日(金)  
5限 芸北小学校の先生の話  
小学校の先生の思い、心がけていることなどを聞くことで、小学校でのインターンシップへの動機付けを図る。

6限 進路指導部より  
実習録の書き方や注意事項など、インターンシップにかかわる最後の説明を行う。

●就業体験

- 授業観察(音楽、体育などでは一緒に活動を行う)
- 児童観察(学級朝会や朝学習、給食、掃除の活動に参加)
- 作業(校庭や花壇の草取り、授業準備・校内掲示の手伝い、図書室の整備・読み聞かせの準備など)
- 記録簿記入(1日の反省を記録簿に記入し、所属の学級担任に提出)



●事後指導

9月29日(月)  
5限 感想文・礼状の作成  
礼状の作成を通して、インターンシップでの経験を客観的に振り返りながら、礼状を書くといったマナーを学ぶ。

6限 総学発表会に向けた準備

30日(火)  
3限、4限 総学発表会に向けた準備  
インターンシップで学んだことを発表することで、論理的思考力・プレゼンテーション能力を養う。

も教師も改めて実感したのだ。  
**地域一貫教育の  
入り口と出口が連携**

地域の教育資源を最大限に活用する取り組みとして、08年度からは「出身小学校へのインターンシップ」が始まった。高校1年生が各出身小学校に出向き、3日間の補助教諭体験を行うのだ(図3)。

「地域にある企業は限られていません。中学校での職場体験と差異のあるものとするには、どうすればいいか考えました」(加藤先生)  
芸北分校はインターンシップの狙いを「働くことの厳しさを知る」

「働くことで得る喜び(自己有用感)を体験する」「人に自分の考えなどを伝えることの難しさを知り、同時に聴くことの大切さを知る(コミュニケーション能力の育成)の3つと定めた。その上で「鮭が大海から故郷の川に戻ってくるように」(小田分校長)、分校を卒業した生徒が、将来教育者として地域に戻ってくることを願ったのだ。

受け入れ小学校の一つ、北広島町立芸北小学校の菅川知由校長は「芸北学園構想の入り口を担う自信を持って取り組みに参加した」と語る。  
「小学生に高校生の姿を見せるこ

とは、地域でこんなふうには育つのだというモデルを見せることになりませう。だから、小学生には『お兄さんお姉さんみたいになるには、今どうすればいいのか』を話しました」(菅川校長)  
09年度には、芸北分校は県立広島大との連携を深め、小中高大に一貫した教育活動を始めた。夏休みに県立広島大の学生を招き、分校生徒に補習を実施すると共に、芸北中学校をはじめ周辺の7中学校に声をかけ、芸北分校に興味のある中学生が分校で大学生と学ぶ「合同サマーセミナー in 芸北」を初めて実施したのだ。

「今後はコミュニティー・スクーを設置し、教育力を継承していく人材、組織を地域につくりたいですね。芸北学園構想の理念は、地域の人たちにも受け継がれ、守られていくべきものですから」(小田分校長)

地域との連携で教育資源を最大限に活用する芸北分校。その進学実績は、国公立大合格者数を見ても、08年度入試で5人(卒業生29人)、09年度入試で3人(卒業生16人)と着実に向上。部活動も、伝統ある神楽部やスキー部は全国レベルで活躍。野球、バレー、卓球、陸上、ソフトテニスの各部も県大会出場などこれまで以上の成果を上げている。こうした中、芸北中学校からの地元進学率は86%と向上、更に近隣の中学校からの進学者も増加するなど、地域からの信頼を確実に取り戻している。

「小規模校でもやってやれないことはないという『芸分魂』を、子ども、地域、そして芸北学園構想にかかわるすべての教師がこれからも大切にしていきたいと思っています」(加藤先生)

**組織的な大学入試問題分析に挑むヒントを得る**

大学入試問題の分析は、進学校にとって教科指導の根幹をなす。「A大の数学の問題の傾向は、どのような傾向で、だからこのような力を身に付けておくことが大切」といった感覚が教師の肌にも染み込んでいなければならない。自覚あるベテラン教師は自然と身に付けているが、組織全体が到達するには、どうすればよいだろうか。と日々自問しているところだった。6月号の特集にはヒントをもらった。「長崎県・匿名希望」

**生徒の進路に直接かわる大学入試分析に評価**

6月号の特集を読み、入試問題からは大学が求める生徒像が見えるものだと、改めて感じた。大学進学者が多い高校で、入試問題分析は欠かせない。数校が共同で入試分析を行ったり、高校と大学で意見交換をする県もあると聞く。特集では、学校の取り組みが生徒の進路に直接かわることを明らかにしてくれた。入試問題分析を通して、分析力を付けるだけでなく、教科の指導力も身に付けることで、自信を持った指導を可能にし、クラス運営にも効果が出る。良い特集であったと評価する。「静岡県・匿名希望」

**どのような「自由」を提供するかが重要**

6月号「指導変革の軌跡」で描かれた鳥取県立倉吉西高校での単位制導入以後の変化に興味を持った。「自由な科目選択」は生徒には魅力的だが、明確な目的意識、意図的な選択ができなければ、もろ刃の剣になりかねない。10代の子どもに土台もなく好きにしないと言って、自分の(学校)生活プランを立てさせるのは難し

教育最前線からのホットな話題を紹介します

い。同校の軌跡はそれを暗に物語っているのではない。「アクションプラン」で生徒にビジョンを示し、そこに到達するためにさまざまな学習・経験をさせる。「目標に到達するために自分に何が必要かを拾捨選択する自由」を重視すべきではないか。「北海道小樽商業高校・阿部保志」

**授業をより進化させるツールとして入試問題を活用**

教育活動の原点は「授業」だと思う。6月号「指導変革の軌跡」の淑徳巣鴨中学校の実践は、最も大切なことを訴えていた。教師の基本は「授業をより進化させる」こと。これにより、生徒は自然と教師を信頼し、進路指導、生徒指導がスムーズになる。あらゆる教育活動が好転していくのだ。特に普通科高校では、入試研究を行い授業を充実させることは欠かせないと再確認した。「福岡県・大牟田中学校高校・荒木信一」

**数少ない機会の有効活用には、データを使う**

時期に合った有効なデータが「生きたデータの徹底活用」に掲載されていた。都市部と違い、地方はオープンキャンパスに容易に行ける環境ではない。数少ない機会を活用するためにも、最適なデータだ。また、生活習慣の再確認の資料は、夏に実施する三者面談で保護者に手渡し活用してもらう予定だ。「鹿児島県・匿名希望」

教師川柳

三者懇 親子の歯車 空回り

兵庫県・匿名希望

編集後記

今年度、進学校から進路多様校に異動された先生に、「生きたデータの徹底活用」の記事制作のためにヒアリングをしました。「授業を始めるまでに10分かかる」など、進学校とは違う実態に苦労されているとのことでした。しかし、「あいさつや掃除、提出物など当たり前のことを徹底すれば生徒は変わるはず。教師があきらめてはならない」ともおっしゃっていました。どの学校でも、「先生の熱い思い」が生徒や学校を変えていくんだと改めて思いました。(松平)

「VIEW21」へのご意見・ご感想を Benesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

- ① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。
- ② 画面右端の「VIEW 21」の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。
- ③ 入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

<http://benesse.jp/berd/>

